
神がここにいる

小田 浩正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神がここにいる

【著者名】

小田 浩正

Z0305BA

【あらすじ】

この作品は1／1から、1／7の1週間だけと言いましたが、1ヶ月間は掲載することを決めました。

＜あらすじ＞

僕が昨日から困っている」とと並べば、

明日が来ないとある。

…えつと、「はやくあしたがこないかなあ」「などという、小学生が遠足前に、考えるような素朴で純粹な気持ちは全くないのですよ…。

なんでこんなことを考えているかといふと、僕に降りかかった不幸のせいである。

僕、穂積隆明は例の事件からのことを考えてしまって、あとの人生がどうなるかなんて全く気にしていなかつた。こんな日々が始まるなど思つてなどいなかつた。

神様その他もうもう出てくるハチャメチャなストーリーが始まります。

〈宣伝〉『電車内は人の心』 もよろしくお願ひします。

プロローグ（前書き）

この作品、結構面倒です。

神様やその他もろもろ出でます。

ハチャメチャなストーリーが始まります。

どうかよろしくお願ひします。

あと、感想もよろしくお願ひします。

プロローグ

僕が昨日から困っている」と言えば、

明日が来ないことである。

えつと、「はやくあしたがこないかな～」などという、小学生が遠足前に、考えるような素朴で純粋な気持ちは全くないのであります。

なんでこんなことを考えているかというと、僕に降りかかった不幸のせいである。

がどうなるかなんて全く気にしていなかつた。こんな日々が始まるなど思つてなどいなかつた。

いきなりですみません。ちょっとヤバい事態が僕の目の前で起きていたので。

僕の叫びを聞いてしまった近所の方。ホント、すみません！
僕の部屋の壁は意外と薄いので、外からの騒音が良く入ってくるのです。なので逆に僕の叫び声も近所に響いてしまうのです。たぶん。女の子の叫び声ならいいのですが、実際は、高音を喉から無理やり出すとしているので、聞いてしまった方々は朝から不快にしてしまったでしょう。ホント、すみません…。

第1話 第1章（前書き）

最初からがぶつ飛ばします！

感想よろしくつ！～！

第1話 第1章

さて、状況を説明します。

昨日、僕にとつて今まで生きてきた人生の中で、一番の試練に会つてしましました。そのため僕は、今までにない疲れを感じ、そのままベッドで寝てしまいました。なので、寝巻を着てない。風呂にも入っていない。もうそろそろ、秋だところのに、昨日の夜は残暑なんか、暑かつた。

すこし汗を書いているのか、体にシャツが張り付いて気持ち悪い。

「風呂に入ろうかな」

ちよつとずつ鈍い僕の頭がゆっくりですが動き始める。

さつきの叫び声の前あたりに戻りますが、あることに気づいたのです。寝ていたはずのベッドから、落ちているのです。近くに最近買ったマンガも落ちている。元々、寝像は悪い方なので自分でベッドから落ちてしまったのではないかと、考えて田をこする。窓のカーテンからさす日差しに、まぶしさを感じながら、ベッドの上を見たのです。このままの展開ならば……

窓からさす光を浴びて、神々しい姿で寝息（？）しているかわいらしこの子が、すやすやす寝てゐる

ところ真合だと想います。

しかし、僕のベッドに寝てゐるのは……。

「なにやつてんだよー！そんなところでおばさん寝てんなんてー！」

そこにいたのは、だいぶ張りのなくなつた頬、唇は不健康さが目立つ感じのすこし紫色に近い。完全なるおばさんがそこにいた。

「……ん。べつ…したの…？朝から…つるせこ…」

僕の悲鳴と怒声で起こしてしまったのか、少し伸びをしていたりを見た。声がかすれている。絶対寝不足だ！と思いつづりこまぶたが重そうである。

「旦が覚めたか？そんじゃあ、『トーアウト…』

「……？横文字は弱いんだぞ？」

「わかつたから…日本語で言ひ直すから…」

イラついてしまう。不愉快だ。朝からすぐに血圧が急上昇というのは、若くても危ない。

「うん、早く言つてよ。眠いんだけど…」

「早く！出でいけ！」

「…？」

「『』じゃあないつ…」

「イミガワカラナイヨ？』

なぜカタカナ？

「お前…ケンカ売つてんのか？」

さて、どうしてやるうか。1日3食抜きにじやねつが

「……プスウ…」

「…」いつ、布団に潜り込みやがつた！

「無視したつ！寝やがつたつ…」

「ムシ～ムシ～ムシ～ムシ～」

「ちょ、ちょっとおい！ き、気色悪いから…やめろつて…」

「…うん…」

理解を得られたようだ。それと言わなければならぬことだが…

「お前さあ、今顔がヤバいぞ…」

「え？…か、顔？…か、鏡は？」

周りを見回し始めたので、近くにあつた手鏡を渡す。

「ゲッ！」

やつと気づいたらしく。

ここで一応言っておくが、今まで僕が話していたのはおばさんであ

る。女の子ではないぞ！そこを！」理解いただきたい。

「イヤッ！ なんで早く言わないの！」

色々ゴタゴタしていたから言ひ暇がなかつた。早く言えれば良かつたかもしれない。なぜなら…

「うん！ これで大丈夫だよ！ 私もピッチャピチの～」

「…幼女ね……」

一回後ろを見て少しふつぶつ何かとなえたあと、ちやんと昨日通りの顔に戻つた。

「さて、これで君をイチロロにできるよ～」

まさかあ～。僕はこんな奴には欲情がわかないんだよー。『世のロリータ』なるものには興味がない！

「イチロロにするんだつたら女子じゃなくて、オーナーになりなよ…」

「うつ…」

「でもあ～

彼女の顔のことが本題ではない。僕が問い合わせたいのが「なんで僕のベッドで寝ているのかなあ？」

そう、忘れてはいけない！ 今も僕は冷たい床の上にいる。話している最中、彼女が上から僕を見下していたのだ。全くイライラして仕方なかつた。

「だつてさあ。まだこの家に来て一日目の寝る場所がリビングのソファで寝させるなんて、いつたい君は何さまなんだ！？」

「お前の方が何さまだつつのー。ここは僕の家で！ 僕の部屋で！ 僕のベッドなんだぞ！」

「それが？」

「ピチッ… キレたぞ！」

「そこにいる化けたおばさんが僕の部屋にいる理由など、なーつー息ついて

「そしてお前とあと一週間過ぐなければならないなんて」めんどつ！」

「それは、きのうはなしたでしょ？」

「あわかつてこるとも。そうしなければならない理由は彼女にはあるが僕にはないのだよ！」

「それに僕はおばさんとも、幼女とも同棲したくないんだよー。きれいな『お姉さん』かもしくは『美少女』かだ！」

「そ、そんなあー」

「わかつたか！ 僕はお前が持ち込んだ厄介事を今すぐお前といつしょに、捨てたくて仕方ないんだよー。」

「ね、ねえ～そんなことまで言わなくていいんじゃないかなあ？」

「僕にはこれほど言いたいことがあつたんだよ。昨日言わせなかつたお前が悪いー！」

さてどう落としめてやるつか？

「で、でもね？お父様の言うとおりじやなきやいけないんだよ？それがだけは……わかつてくれる？」

ここでのお父様とやらの話をされた。だから、これに対しても一つの言いひとおりでないと僕の命が危うい。

「そんじやあ～さあ……何か僕に利益もあるの？」

「うんうんー、それはこれから君次第だよー。」

……ハツ？

「頑張れば、君の未来は切り開くことができるー。」

「……」

「君とならできるんだよー、君じやなきやむつだよー。」

「いっ、頬を赤らめながら叫んでいるところがかわいいんだけど、実際にはおばさんだから、少し残念な気持ちにされてしまつ。」

「まあ期待しといでいいんだよな？」

「そうだよ。期待しといったほうが絶対いいよー。」

しかし、これからなんだよな。あと一週間耐えられるかわからない。

「さて、僕らがやらなければならぬこととかは、昨日言われたこ

とだけなのか？」

「うんそうだよ。それで、私にもちゃんと能力があるから大丈夫。
なんとか君を助けるぐらことは出来ると思つよ」

「その自信はどこから？」

「元々、保証できるものだから自信があるんだよ！」

「いや、だからそれがどこからなのかつて言つてるの」

「？ だつて神様だから！」

そう、こいつは神様の修行者。

会つたときにそう言われた。堂々とね。

「……うん。わかつたよ」

僕は彼女に笑顔を向けてあげる。内心、憐れんでいます。

「そうでしょ。私のことを信じていれば、君は死なない」

恐ろしいことを言つ。だがこれは脅迫などではない。実際にあつた
から。

昨日は危なかつた。危なかつたというより、死にかけ、死んだ。だ
が、こいつの能力で助かったのかは知らない。

「あ、すっかり忘れてた」

変なこと思い出してしまつた。昨日のことを回想していくら、今一
番気にしてなくてはならないことを思い出した。

「今、何時？」

「ヒツト…私二八人間デ言ウ時間トイウモノガ理解不能デシテ…
絶対わかってるよ、こいつ。

「…早く」

「は、はい！」

2人で時計を探し始める。

いつもはベッドの近くに置いてあるのだが、昨日は時計をセットしなかつたためどこにあるのかわからない。

「あつ！ あつたよ」

「何時だつ！」

「午前八時前です」

「ノオオオオ！」

今日は学校なのだ。それも週のど真ん中。自分が起きた時間が把握していない僕がいけないのだが、いままでとは全く関係がなかつたことに関わり始めてしまったため、何もかも狂い始めているのかもしれない。

「ど、どうしたの？」

「学校なんだよ！ 僕たち学生は勉強に励まなければならないんだよー」

自分で言つてるのもなんだが、あまり授業には集中したことがない。

「ちよつと、や、ヤバ！」

「？ ホント大丈夫？」

「制服！ 制服はどこだよ！」

おいおい。この時間にはもう学校に向かつてなきや間に合わなくなれる。昨日のようにはなりたくない！

「これのことか？」

「おいつ！ なんでお前が踏んでんだよ！」

さて、どうするか？ 親が特殊だから弁当は毎日僕が作つていい。なので、どこかしらで弁当を買わなくてはならない。すべて昨日と同じことをしてしまっている。

また、僕は大変な目に会つてしまつかもしれない。

なんか、「タタタ騒ぎで済みませんが、一応説明しちゃいます。

僕のベッドの上にいるのは、幼女に化けた僕より長く生きている神様の修行者らしい。そして、昨日から居候し始めた。僕はこんな日々を過ごさなければならない。

どうしてこうなったのかは、一回僕の主観の昨日といつより、周りの人々を主観とした昨日から説明をしなくてはならなくなってしまう。

それでは、僕とおばさんの出会いをなるべく短くお話しします。たぶん短くはならないけど。なるべく短くします！なるべく…。では昨日の回想を始めます！

第1話 第2章（前書き）

『電車内は心の中』 もよひしへお願いします。

ある晴れた日のことです。

その日もいつも通りに、教室の窓側の1番奥の席（いわゆる特等席）で、とある授業でよく寝ている、僕の目の前でいつも通りに熱血先生が鼓膜を破るような勢いで、

「起きてるか！」

「は～～い。起きますよ！」

もう完全に慣れてしまったこの会話。

「そうか！ その調子でがんばれ！」

…毎回思うのだが、アホなのかな？ 僕は、黒板なんて見てないで、机で日向ぼっこ窓の方を見て… 「あ、トンビだ」など眺めるかの2択。この授業を全く受けてないことをクラス中のみんなには、知られている。教科書は開かないし、ノートは真っ白つて言つより、この授業だけはノートを持つてこない。なぜかつて言つと、この先生の最初の授業で、僕は驚いてしまった。

黒板に書かれた文字が読めない…。

まあまず、日本語じゃない。

英語でもない。

アラビア語に近いのだろうか、ほとんど記号が集まつて、文が構成されている。

それをクラスのみんなが全く気にしないで、ノートを必死にまとめている。

それに、50分授業のはずなのに1人あたり、ノートをめくる音が普通の授業だと、1~2ページしか使わないはずが、3回以上聞こえるのである。つまり、6ページ。そんなにページを使って何を書いているのか気になってしまつ…。

内心では、もう授業についていけないなあと思つた。というか、確定事項になつてしまつたが…

「いい加減にノートに黒板のをさあ～写したらどうな～」

先生が僕の所から黒板まで戻つて、また何かよくわからない文字列を書き生み出し始めた後に、隣の須原さんが話しかけてきた。

「前から言つてるじやん。日本人なのに先生の文字が読めないんだよ。僕、日本人をやめてしまつていいいのかな？ それとも先生が日本人をやめた方がいいのかな？」

「私は、君がなんで読めないのかわからんないけどね」

「いや、なんで僕以外の人気が先生の文字読めるのかわからんない」

「じゃあ、例えば黄色で書かれたあの文。読めるでしょ」

「 × …」

「……。わざと読んでないよね」

「……」

「いかにも、アニメに出できそうな言葉を使ったよね」

「これ以外に、表すことができないんだよ！」

「本当に読めないんだね。君のこと憐れんでいいかな？」

「そんなことで僕はめげない！」

「じゃあ、授業ちゃんと受ければいいじゃない」

もつともである。

「じゃあさ、なんて書かれてるかわかるの？」

「こう書かれてるんだよ『テストに重要だから覚えておけよ。では、書いてやろう。そう、おいしいプリンの作り方 だ！』」

この授業、世界史だつたはずなんだけどなあ…。一応、初めてプリンが広まり始めたか、触れておきたかったのかなあ。それにわざわざ喋つてることをさあ…そのまま書いているのかあああ！

「『材料（5個分）プリンの生地卵 3個（Mサイズ）…』

キン コーン カーン コーン

須原さんの先生が書いた文字の翻訳中に授業の終わりを告げるチャイムが鳴つた。

「おひと、もうこんな時間が」

まだまだ説明する気でいたらしい。

「では、授業を終わりにする。今日の授業の復習として、1回でも親のために、私のおしゃべりプリンのレシピを使って、作ってみるといい」

「はいっ！」

「では、わいばー！」

いつも通り、クラス委員長の今図也、「氣をつけ・礼！」の代わりに、

「レディー・ゴー！」

と叫び、ドアの近くに座る人が思い切りよくドアを開けて、先生が勢いよく走りぬけていく。凄まじい音が廊下を響いている。

「さて、部活～部活～。夏の甲子園に向けて、レッツ・ゴー！」

「野球部のマネージャーだつけ？」

話しながら彼女は、足踏みをして

「ぱいぱーーい」

「無視ね…」

走り去つて行つた。

それに、他の子も部活が楽しみなのか、ほとんどの人が、1分以内に教室からいなくなつた。普通に体育系でない子たちまで走つてた。その中に、やつきの彼女も含まれる。最近は文芸部もちゃんと体力作りからがんばるのかな？

さて僕も、学校にいる意味がなくなる。なぜなら、帰宅部なのだから。…あんまり自慢げに言うと心が痛む。というか、帰宅部の目標が誰よりも早く自分の家にたどり着くかの競争なのに、幸先、スタートからもう出遅れた。もう、帰宅部としての威儀がない。まあ元々ないけどねえ…。

「どけどけじけー！」

と掃除係の人がタックルしてきた。いつもながら、とにかく部活に早く行きたいそうで、人のことなんか全く考えてない。よくて3分待つてくれるかどうか、きわどいところ。カツ丼も待てないのか。

こんな教室からとっとと出た俺は、することがない。人生がこんなのでいいのか?と言われると、まあ別にいいかな~というぐらいに

グダグダな生活をしている。

こんな日常で僕は十分良かつたのです。枯れてませんよ? ですが僕はこれから日常がこんなにも変わるなど、この時もまだ知らなかつたのです。

第1話 第3章（前書き）

元々原稿を書いてあつたので、1日でこれほど掲載できました。

『電車内は心の中』 もよろしくお願ひします。

僕の特技と言ひてはなんですが、そこらのリア充（僕より生活に充実しているということです）とは違い、朝が強いため、規則正しい生活（身体的に）を充実させているのです。ここは胸張つて自慢しますよ！それで、朝飯も食べ、制服に着替え、いざ行こうとするのですが、たいてい…

「ねえ、お母さんのために、朝ごはん作つてえ～」

だらしないお母さんが登場。髪がボツサボサの状態で、眠たげな顔している。

そして

「なんで、またパジャマ着てないんだよ！ 風邪ひくだろ！」

「前から言つてるじゃない。ちょっとパジャマつて苦手なのよ～」別に家族だから気にしなくてもいいと僕自身が許せるなら、いいんだけど…。子供の僕から見ても、お母さんのスタイルがまぶしそぎるのである。

お母さんの名前は、穂積愛里子。仕事が女優で、40を超えて全く世間からの評判が落ちず上位におり、僕の友達でも、お母さんのファンがいるほどだ。

しかし、それは表の顔だけで、家に帰ってきたら、完全に僕よりおこちやまになつて、家事全般、僕に全てまかせっきりにする。もうちょっとと自立してくれたらいいのに。

「もう行かなくちゃいけないから。というか、フレンチーストグラードは作つといったから」

「ねえ、もうちょっとお母様のために、おいしい心温まる手作り料理とかないの～？」

「どうか、僕の腕に絡みついてくるな！胸が当たつてる…」

「うふふ。赤ちゃんの時は、お母さんの胸を鷺づかみにしてたくせに～」

「とにかくはなれろー。」

「お母さんのために作ってくれるなら、放してもいいわよ～。だから、おねがいしま～す～」

涙を浮かべた目で僕を上目づかいで見てくる。どう見ても、芸能界の清楚な美人が全くの台無しになってしまってこる。

「もう、わかったよ。ちゃんと作りなおすから…。早く放せ…」

「うんうん。お母さん、明けやんがこんな子に育つてくれて、ありがたや、ありがたや～」

本当に手を焼く親である。

ほんの10分で、ちゃんとした料理が出来上がる。作ったのは、少し焦げたスクランブルエッグ、ワインナーが2本、それも、弁当用の小さい赤ワインナー。あと先ほど作ったフレンチトーストを焼き直し。作っている間、

「まだ、できないの～？」

とか
「早くしてよう～！」

とか

「がんばってえ～」

とか、とにかくうるさかった。

そして、僕の体にまとわりついてきたり、首締めてきたりして、フライパンを手放すしかない状況に追い込まれ、スクランブルエッグを焦がしてしまった。初步的なところで、失敗するなんて、ホント、自分が情けない…。

「じゃあ、明ちゃんの愛の～もつた手料理、いただきま～す～！」
ホントめんどくさい。そういうえば、もつそろそろ学校に行かないと遅刻する時間になつてきている。

「～のスクランブルエッグの焦げ具合がちょうどいい～」
なんか失敗したところが、高評価もらつてるんですけど…。なにが

いいのだろうか？炊き込みご飯のおこげとかならわかるんだけど。

「満足したんならもう行くよ」

「そういえば…。」

「ねえ？今日、確か映画の撮影だつたよねえ？有名な俳優ばっか出るやつ。夜遅いよね？」

「何言つてるの？昨日話したばかりじゃない。明日よ。今日は丸一日暇なの。だから、なんか楽しんできちやおつかな～？」

「ちょっと待て…。明日？昨日話した？何言つてるのか理解できない。だつて、

お母さんの予定聞いたのは、おとといのはず。

おととい、お母さんはドラマの撮影のために、夜遅く帰ってきて僕は母親思いのいい息子のため、温かい料理を作つてあげた。そして、昨日は丸一日休みだということで、ショッピングモールに出かけたと話を聞いていた。

「そうだなあ…近くに新しくできたショッピングモールで明ちゃんのために、なにかいもの買ってきてあげようかな？楽しみに待つてね。あと、時夜さんのために、いいネクタイでも～」

時夜さんは、僕の父さんで、えつと…いまどこで何しているのか、お母さんしか知らない。なぜか教えてくれない。相当やばいことやってるのかな？

もしかして、軍の特殊部隊所属していて、僕たちの平和は彼うつって守られているとか……ないか。

「もう行かないといけないんじゃないの～？」

時計を見ると、いつの間にか10分たつてとっくに、遅刻してしまった時間になつている。

「そりだな……あのさ、もうそろそろあいつも起こしことかないと、学校送れちゃうぞ」

僕の家族は4人家族だ。紹介した両親、僕の他、中学生の妹が

いる。いつも僕に起^ひしてもらわないと起きないが、今日ぐら^こいは自分を大事にしたい。

「うん、わかつたあー。わたしじや起きないかもねえー」

「とにかくお願^ねいね！ じゃあ、行^いってきます」

「いつてらっしゃいー」

でも、さつきの話、僕の誤解だつたのかな。まあそんなことはいいや。今は、僕が遅刻して担任からのしつこい長話^{ながはな}しを聞くのがいやなので、急いで家を出た。

……のはいいけど、ヤバイ…弁当作^{つく}んの忘れてた。

第1話 第4章（前書き）

どうぞん掲載していきます。

第1話 第4章

遅刻しているついでに、昼「はんのためにコンビニに寄る」とになりました。

別に学校の購買で買えばいいかもしないけど、そんなところで買うことになつたら、僕なんての華奢な体の僕には、死が待つることになつてしまふ。いやマジで…。

昼前の三時間目終わりを告げるチャイムが鳴ると、購買前は戦場化する。

皆求めるは、この学校のOGであり、ミスグラソプリで優勝をしたことある香夜美先輩が1人ずつに渡す『特製とにかく粒が大きいアンパン税込み価格315円』。

なぜそんなところで香夜美先輩が働いているかというと、前まで働いていたおばあちゃんのことが大好きだつたらしく、よく手伝いをしていたらしい。

とっても評判も良かつたらしいのだが今は、寝てないといけないくらい体が悪くなつてしまつたそうだ。で、おばあちゃんのために引き継いだらしい。

心温まるお話なのだが、実は、香夜美先輩はどんな時でも特製アンパンを誰よりも先に買うために、周りの人を押しのけ、叩き潰していたそうだ…。

その時の彼女の2つ名を『破壊神』。全くもつてそのままだな。友達の先輩たちの話では、いつも溢れんばかりの微笑みで、周りの人々を心地よくしてくれる人が、その時だけ妖怪のような恐ろしさを振りまくらし…想像するだけで寒気がする。

それで今は香夜美先輩がいないので、けが人が前より少なくなつた。それでも、そのアンパン（まだ食べたことないけど）限定10個のために、命がけで戦いたくもなし、そこで戦場に巻き込まれたくもない。だから、コンビニのおにぎり（梅干しとシーチキン）

を買わなくちゃいけない。まあ、通学路の途中にコンビニがあるし、前もって何を買つか決まっているし、そんなに遅れることはないかな。

コンビニ前の交差点にたどり着いた。片側2車線の大通り。両側で四車線。

ここにたどり着く前に赤信号は何回も引っ掛かるとはとんだ災難だつた。

もうホームルームも始まってしまった。気にしない、気にしない。どうせ怒られる。なら、もっと遅く行つてもいいのではないかと考えた。もづ走る気力すらない。もうそろそろ信号が青になるかな〜?

「……長い。長すぎるー!」

大通りだから、信号が変わるのに長いことは、わからなくもない。しかし、排気ガスを吐きながらトラックが走り去らないで静まっている。1台も通らない。なぜだ?

「もう我慢できない…。勝手に渡っちゃおー!」

と思った矢先、後ろから長い茶色を帯びた髪を垂らした十一歳くらいの女の子が僕を抜いて、どんどん横断歩道を突き進む。

先を越された…僕も渡ろう…。

そう思つて渡ろうとしたら、猛スピードで1台も通つていなかつたこちらの車線に車やトラックが一斉に走ってきた。どこかの信号で待たされていたのだね、とてもじゃないがスピード違反しているんじゃないかと思つ。

だが、反対車線の方を見ると1台のトラックがののひ、くねくねと女の子めがけて走つてきていた。

ヤバイ、居眠り運転だ!

彼女も気づいたらしく、反対車線の真ん中で車のほうを見てしまつている。

引き返した方がいいのか、渡つちゃった方がいいのか、わからなくなつてしまつてゐる。

「なんで、そんなとこで止まんだよー。」

そこで眺めてないで早く渡れよ！

僕はどこに走り出した

なんで走っているんだろうか……。

ああ、助けるためか……イヤイ

には手を出すはずがないのに！

ああああああああああ！

もうしょうがない！

どう助けるか?
引っ張つてこちらに戻すか?

これも無理そつだ……。足が震えているのが、誰が見てもわかつてしまふ。

まつ。

もニ一かバかたなあ

僕は思いつきり彼女に向かって走る。

と云ふが、ては、と自分が云ふが、夢にて、彼女の三を握り、向

だから、走る。

走る。

「間に合ひつ！」

なんか間に合った…と思つたが

一
あ

あと1メートルのところ、中央分離帯のあたりで、足元に転がつていた石につまずいた。

なにやつてんだよ、僕よ！

云々が意味れんじゆ

ヤバイ、ヤバイ！

いつこいつときに冷静な判断をしなくては。

……無理だ。

ヤバイ、ヤバイ！

駄目だあああああ！

状況を確認しよう。

たぶん今僕は、ウルトラマンの要領で、飛んでいると思つ。例の「トオツー」で、手を前に出して飛び立つ感じに。完全に三球三振三アウトのようだ。

たぶん、もう僕はそのまま彼女の近くで無様に転ぶだらう。彼女は動けない。

2人そろつて死ぬことになるだらう。

彼女がこちらを見てきた。

泣いている。

恐怖で体が震えている。

動く気配もない。

もう無理だなあ……。

女の子に一応謝つとく。

1人じや死なせないぜ！

心の中でだが。

こんなかつこいい言葉、声に出せるわけがない。

あ～～あ……

最後の最後まで僕は人のために、何か出来る男ではなかつた。人助けぐらいしたかつたなあ……本音だよ。

このまま2人で天国に行こう。

悔いの残る人生だった。

特にまだ、何にもしてないからね。

お父さん、お母さん、ごめんよ。

……いや、まだだ…。

彼女はまだ救いようがある。

まだ、彼女の人生を終わらせるのは、かわいそつだ。
頭をフル回転させる。

せめて、せめて。

僕は体を必死に動かした。
空中で、必死にもがいた。
いわゆる平泳ぎのように。
もう少し、浮かんでいられそうだ。
今、僕は賢いと思った。

なぜなら、この状況でまだ彼女を救える方法を思いついたから。
僕は、とにかく彼女に向かつて飛んだ。

飛んだ。

飛びまくつた。

たぶん2メートルぐらい。

そして、彼女の体にタックル！

ホントごめん。

痛いだろうけど、今は我慢が大事！
なんとか彼女を押し出した。

思いついたのはそんな簡単なこと。
しかし助けることは出来たと思う。
残るは僕だけ…。

そして、無様に、地面に落ちた…。
女の子がこちらを見てきた。

驚嘆した顔だ。

タックルされても、痛そうな顔をせず、ただ驚いている。
せつかく助けてあげたのに、微笑みぐらい向けてくれたっていいじ
やないか。

たぶん、最後に見る表情なんだから。

そして僕は彼女に向けて、微笑んだ。

僕が生きている間の最後の表情だ。

そして、死んだあとも笑っていられるよっこ。
涙は出なかつた。

出る理由がなかつた。

時間にして、1秒ぐらいかな。

僕の体はあっさりとトラックのタイヤによつて踏みつぶされた。

第1話 第5章（前書き）

回り口ばかりでなく、トックするの疲れたので、今日せっけんまでです。

ここは、天国である…わからないけど。

絶対そうでなければ、どれほど閻魔大王がちまちました奴なのかはつきり分かる。なぜなら、別に地獄に落とされるようなことはした覚えもないし、最後の最後で人助けをしたのだから天国にいる権利ぐらいはあると思う。

それとも、女の子も巻き添えになってしまったか？

それだったら、天国にいる権利もないか。

じゃあ僕は天国と地獄、どちらに行けばいいのかな…。

それにしても、気になる。ちゃんとあの女の子は生きているのか？もしかして…僕のことを助けるために戻ってきてしまったとか。そうなら、ありがたいなあ…。僕を見捨てないでいてくれる人がいたことになる。

しかし、ここは幻想的なとこである。というか人が思いつくよくなところだつたら、天国いる気がしないはずだ。

とにかく、周りを見ても流れる雲のようなのが、太陽の光のような淡いオレンジに近い赤色と白が混じって、漂っている。まるで僕を包み込むような感じに。

まあとにかく表現するのが難しい。なんともいえないのだ。

そういうえば自分の体がない。ないというか、体がないだけで魂がむき出しになっているかのように、宙に火の粉のようなのが浮いていると考えてもらうとありがたいです。

さて、これから何をしていいのかわからない。動いてみるかと思つて、やろうとしたんだけど、はつきり言つとく。動いてるか分からぬ。

なぜかというと、まず第一に体の感覚 자체がないから。

第一に動いていたとしても、周りを流れる雲のようなものが動いて自分が動いているか、全然わからない。

困った。ホントわからない。助けが必要だね。だれに?……ぐわあ

近くに僕みたいなものもないし、天使のようないがいたつていいのかな? もう神頼みだね。近くと言つても助けを求めると言えば、やつぱ神様ぐらいだね。しょうがない。

(神様)――どうかお願ひします。)

……やつぱ無理か、はあ――。

「ホント、ダメそうね。」――

そんな言葉が聞こえた気がした。

あれれ、何とか届いてしまつた? 聞こえたけど意味が理解できない。そこでなんで『ダメ』なんだ?

僕はこれからどうすればいいのかな? 助けてもらえるかとそんなことをあれこれ考えていたんだが、

周りの景色が急に青と黒の境目のような色が広がつた。

なんだ、なんだ? 何の儀式だ? 太陽の光は消え、雲の流れは速くなり、紫電が走る。

さつきまでの心地よい雰囲気から、冷めた悲しみのようなのが僕の心に押し寄せてきた。

怖い。

マジで怖い。

神をおこらせる事でもしたのか?

お前なんてほんの少しで握り潰すことが出来るんだぜのよつた感じだ。

地獄に落とされたのか?

もうだめだ。

田といつものはないけど、田を開いた。たぶんそんな感じだと思ひ。

完全にシャットダウンした。

本当に周りから切り離されたような感じになった。

わづ、この世界にもいられないと思つた。

かのじこでも飛ばされてしまふ。

第1話 第6章（前書き）

長すぎるので、編集し直しました。

どうもすみませんw

第1話 第6章

叩かれた…というより殴られた。
え…なんで？

僕の体はないはずだ。
見えなかつたし、感覚自体がなかつたはずなのに、誰かの手が僕の肩近くを叩いてきた。

ちょっと待てよ…。神様が何かなさつた？ さつきまで完全シャットダウンのはずだったのに。

まあ、どうせ神様だし、簡単に僕のことなんか、色々変えられちゃうんだろうね。

怖いけど、とにかく目を見開いた。全力でね。
殴られた…一応叩いたことにしどう。叩かれたということは人もしくは動物がそこにいることは間違いない。ということは相手は応答がほしいんだろう。だから開けてみた。
なんだろうか、前がぼやけている。

幻想的なところである。

あれ？ あちらこちらに灰色の建物らしいものがそびえたつっている。
さつきよりモヤモヤしているところだなあ。
でも、自分の腕のようなのが見える。

僕の予想だと、違う世界に飛ばされて今度は実体化できるところとかな？ まあ、なによりいいがあ。そして、よくまわりを見てみた。

なんだらう。青いような緑色が光って見える。
そんな遠くではなさそうだ。正方形型で、青といづより緑のほうが近い。

なんだらう。ピッポ、ピッポのような音がする。

前方から聞こえてくる。そのあと、音が変わり光も点滅し始めた。音は、ポ、ポ、ポ、ポの一定で、それに合わせ光も点滅している。

そして下の方を見た。

なんだろつ。前に体全体にモザイクがかかつた女の子のよつな人間型がいる。

「女の子？」

身長が僕の胸あたりまでしかなく、こちらを見上げている。なぜだか知んないけど周りがクリアになつてきた。

だいぶ見えてきた。何か見たことある風景だ。ちょっと考え中…。あ、生きていた時のコンビニ前の横断歩道だ。

そう、僕が死んだと思われる横断歩道の目の前に今いる。

いやあよくできている。なんというか懐かしさがあるねえ。うん？ どうか、この世界は死んだ人が第2の人生を送れるように作られた世界なんぢやないか！

これにはちょっと期待。なぜなら、第2の人生となれば、やり直しが効くんぢやないか？これまでのつまらない人生を捨てていざ！新世界へという感じ。

そんなことを考えてウハウハしていた。それであることに気づく。

……待てよ。女の子が目の前にいる。

よーく見てみたら、

おーおい、その子もなんでそのまま同じ子なのか？
生きいてた時と全く変わらない状況だよ…。

「どうしたの？ サっきまで地獄の閻魔様に会つてきてたかのように顔が青白だつたのに、急にほつぺたダラ～ンとし始めちやつて？」

僕の目の前にいる女の子が顔を覗き込んで来た。女の子の指摘が合つていれば、相当恥ずかしい顔だつたに違いない。とにかく僕は恥ずかしさをこらえ無表情に努めた。

「さつきからずっと立つたままだけど、大丈夫？ それに表情豊か

なお兄さんだね。今はゆでダコみたいに真っ赤かなのに無表情なんて。ブツ…」

笑われた。クツ…。

「私がそんなになつたら、恥ずかしさのあまり逃げ出すよ、だぶん？（笑）」

ニヤリとしてきた。なんと好戦的な少女。

大人を甘く見ちゃあいけない！

だから、僕は君の言葉にはのらない。大人げないからだ。

「お～～い、聞こえてますか？ 聞こえてるよね？ ジャあ、言うよ

「なにを？」

「そんな目で私と目を合わせないで！ 死んだ魚のような目をして、小学生を見ないで！ まだ、口り好きの太つた男に好奇な目線で見られた方がいいね！」

「なつ！」

なんだなんだ、この少女は！ 生きていた時に助けた時は、おとなしそうだったのにこっちの世界では、僕をけなすサイヤクな奴に変身してしまったのか？ 何という変わりっぷり。哀れである…。そしてイライラしてくる。

しかし僕は大人だ。のつてはいけない
「お、ちょっと怒つた？」

勘の鋭い女の子だ。

「ああ、少しだ。すこしだけ」「

「ちゃんと生きてるじゃん」

ちゃんと生きてるよ！

あ、でも、もう生きてないか…。もう死んだよな…。僕はそう思う。

「大丈夫そうだね。何を考えていたのか知らないけど、相当必死にまぶた閉じてたし。どつかのおじさんの怒った顔に近い感じだったけど」

そんなにヤバイ顔してたのか、僕よ…。

「ほら、なんかまた変顔しないの」

今、どんな顔になつているんだろうか。気になつて仕方がない。

「正直に言つけど、ホントおもしろいよ」

また笑われたよ…。

「何か大丈夫そうだし、そろそろ私、行かなくっちゃー。お兄さん、ちゃんと高校生らしく生きるんだよ～～」

年下に励ました。そんなに僕、哀れ?

そこで彼女は赤信号で横断歩道を渡つた。
うん?……赤信号?

「ちょっと待ていー!」

待て待て待て!

なんだよなんだよなんだよ!

「え、なに?」

なぜだなぜだなぜだなぜだ?

なんでそんなところで止まるんだよー。

今回は、速攻で走り出した。

怖いからだ。

怖すぎるんだ。

前と同じようなことが起きるのが怖いからだ。

事故が起きた前に何とかしようと思った。

少女は、じけらを見て不思議がついている。

そんなのはどうでもいい。とにかくそこから離れなくては…。

今、気持ちと体が、タイムラグのないぐらいで動いている。

さつきとは違う。

心身ともに、彼女を救いたいと思つているんだ。

車が来た。

前と同じだ、何もかも。

こちらの車線には猛スピードで駆けてくる。反対車線はくねくね走つてくるトラックが来る。

だから、僕は足元を注意しながら、彼女の手を握った。本当に彼女は不思議がって、こわばつている。

とにかく引っ張つて、向かい側のコンビニに走つこんだ。

ギリギリセーフ。

「ちょっと、お兄さん。なんなの？ 誘拐？」

彼女が困り果てた顔で、そう言つてきた。

まるで自分がこの後何が起きてしまうかもしれなかつたといつてまるで自分を、全く分かつていない。

その顔を見て、頭の中でブツーンと切れた。

「なんで赤信号で渡るんだよ… 車が来ないからつけて渡るのかよ…」

事故が起きたらどうすんだよ… なあ。なああ…

「ちょ、ちょっと。な、なんで泣いてんの？」

知らないつちに、まぶたに溜まりまくつた涙が滝のように頬を伝つていた。

おいおい、どうした、僕よ。女の子の前でこんなに泣かなくつたっていいじゃないか。

「…少し悲しいことを思い出して…」

とにかく夢中で、叫んでいたから、特に理由がない。

自分の心の叫びだったのかもしれない。

だから、理由としては当てはまつていそうな言葉を言つた。

「…

今氣付いたが、僕は少女の胸に飛び込んで泣きまくつている…。超恥ずかしい…。

「そう…えっと…悪かった。悪かったわよ

「…何が？」

泣ぐのをこらえて、少女の顔を見てみた。

彼女の顔がほんのり赤い。そして、恥ずかしそうに泣き声を止めた。

「その…赤信号で渡つて…」

「ああ、そんなことか。

そんなことかだよ。

しかし、そんな言葉を期待してたのかな、僕。前の世界では聞けなかつたなあ、その言葉。だから、心が落ち着いた。

「…わかってくれたんだつたら、いいよ」

なんだか、むずがゆいこと言つてしまつたなあ…こちらから話しづらくなつてしまつた。それは彼女も同じだつたようで氣を利かしたのか、

「…ありがと」

と言つて走つて行つてしまつた。

「……」

ちょっと氣持ちがあさまつてから、僕は学校に向かつた。

一応、この世界でも学校はあるだろ。

担任の説教の長話しがこちらではないかも知れない。ちょっと期待あ、そういえば、あの少女の名前聞かなかつたなあ。まあまたこの辺で会えるんじやないかと思つ。

それでだが、学校の正門前で氣づいたんだが、やはりこちらの世界の僕のバックの中にある物だけがなかつた。

なんでだよ…。作つといてくれたつていいじやないか！ 弁当つ！

それに、コンビニに寄つて昼食買うの忘れた…何してんだよ…

第1話 第7章（前書き）

続きW

普通に下駄箱で上履きをはいて教室に向かう。

誰もいない。

それもそうだ。なぜならもう朝の会も終わり、1時間目が始まっている。

しかし、急ぐそぶりを僕はしない。

走りたくない。

授業をサボりたいというのもあるが、この廊下の静けさが何と言つても「走るな」と訴えてきている気がしてならない。歩くだけで少し音が鳴るので忍び足になつてしまつ。

もうちょっとと堂々と生きた方がいいのかな?

今日は、数学からである。はつきり言つ。朝から数学をやると一日の自分の体力を半分以上使う。

これらの意見は誰もが共感してくれるんじゃないだろうか。

- 1に、数学自体がめんどい。
- 2に、授業が淡々としている。
- 3に、先生が私語禁止という授業をしている。
- 4に、先生がめんどくさそうな顔して、授業している。
- 5に、みんな催眠術にかかる。

理由としてこの5つがある。

- 1つ目は、僕個人の意見だから気にしなくてよい。
- 2、3、4、は先生のせいと言つても過言ではない。授業は先生の一方通行、つまり、先生が指名して答えさせることがない。
- そして、私語禁止に先生自体がめんどくさそうに授業をやっている。もうこれは、知らない…。
- そして、集団効果なのか5つ目として催眠術にかかり、寝てしまう。

しかし、出席日数が足りなくて退学させられるのはよくなないので、行かなくてはならない。

僕のクラスは、昇降口の近くの階段を上がって、2階のすぐ近く。少し気合いをいれて、こざるーーーのは良かったけど、中を見てみたら…なんで

「なんで、だれもいないんだああああああああああああああ！」

教室間違えたか？ はたまた、授業間違えた？ それとも、こちらの世界では数学がないため違う授業をクラスのみんなは受けているのかもしれない。なんという、ありがたみ。……ある訳ないじゃん、何バカなこと考えてんだよ、僕よ。

それでどうするか。なにをしようか。

一応、自分のクラスはあることを確認した。だって一年一組なのだから、なかつたらどうすんだよ、この学校。
そこで、教室には入つてみた。

気づいたんだが、ちらほら、机の近くにバックが置いてある。あと、教科書やノート、ペンケースがある。ペンケースで誰か教室に忘れたのかな。

どこか歩いて行つて探すのもいいけど、戻つてくるんじゃないかなと思って窓側の奥の自分の席に座つてみた。

「今日は快晴のため、ぽかぽか日よけで口中はとても過ごしやすいでしょう」

とこうお天気おねえさんの話は合ひていて、寝心地のいい快適な特等席となっていた。

「こんなにいい天気なんだし、寝ても罰はないよな
では、おやすみと言いたかったんだが、ふと見てしまった。グラ
ンドのほうを…。

「なんで昨日やったマラソンを今日また、この時間にやつてんだ？」

もう、頭がこんがらがつてきた。

1時間田の授業の終わりを告げる鐘が鳴る前に1回教室から出た。なぜならじつして寝たまま待っていたことになると、完全にサボりが確定してしまう。そうならないためにみんなが教室に戻ってきた後、再び教室に入れば、

「おう！今来たのか？遅せえなあ。サボりか？」

「いや、ちがうって。ただの寝坊だよ」

という感じでうまくいけるはず。

そんなわけで、どこに隠れるとするか。

鞄を持つているから、あんまり田立たないとこがいいのかもしない。

最初トイレで待つてようかと迷ったが、たまに何人かがそこにたむろっていることがある。そんなところで待つのは全くごめんだ。人通りの少ない廊下で待とうかと思ったが、そこまで移動するのに別の教室にいる何人かには絶対見られる。

なので、昇降口から入つて来たかのように偽る。

この場合はさつきも話したと思うが、この教室はこの2階のどの教室よりも階段が近くにある。そのため誰にも教室から見られることがない。

何と運と頭の回りのいい男なんだ、僕は！

そんなこんなで、下駄箱の近くまでたどり着いた。

体操服を着た誰かが入ってきた直前に、下駄箱の前で上履きを履きかえれば、誰かしら今、僕が来たように見えるだろ？。さてと、準備、準備。

「やっぱあいつ、サボつただろ！」

「さあな。でも、俺たちのつらさを味わつてほしいもんだぜ？」

「まあ、来たらしぼいてやるつた。うふふふ……」

なんでもう来てんだようううう！

見てみると、うちのクラスの奴らがいた。

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

も「運が悪いすぎたよ」としてたよ。

何人がどの駒馬籍に登録しているかを確認する。

「もつちよつとお手柔らかにしたら？」
例えば何人かで集まつて言

葉攻めしたらどうかなあ～？」

お、それもそれでありか。オホホホ……」「

卷之三

「そんなのは嫌だよ！せいかんなんじで！」

片山の言葉

全部付かなかつた……。

「アヒルの卵をもつて来た。」

תְּבִ�ָה

布す弋だよ…。

こんなにクラスメイトが危ない輩だつたとは知らなかつた。もう会

えない世、この人たちとは

早々に脱出しなくちゃ

馬糞近くの廐にて身を潜めていた僕は、早くここから立ち去らねばならぬと思つた。

も、う、ざすれば、いかがわかんねえ

トントン

「うん?
なんだあ?」

「ハア～～～イ」

「…せ、先生？」

後ろにいたのは、僕の担任の高橋明日奈先生だった。

てか、この人笑ってる。笑ってるんだけど、目が笑ってないよ…。

「うん、担任の明日奈先生だよお。さあて、君はここで何をしてるのかなあ？」

笑顔がチャームで生徒からの信頼があるこの担任が今は怖く見えてしまう。

モウダメダ。

見てられない。アハハハハハ…。

第1話 第8章

さてと、まあ担任に職員室まで連行されていひびく叱られた。家での事情に事故りそうになつたことを細かく話してあげた。まさか本当に事故った方を言つちゃうと、なんかじたばな騒ぎになつてしまつ気がしたから、そのことについては何も話さなかつた。

それに、なんかいい暇つぶしなつた。

意外と叱られていても全く気にしなかつた。

ただ、担任を見ていただけ。

みんなよりも多い時間を見てられると思えれば、うん、それだけで満足。さつきの事故のことなんか忘れられる。

そんで、教室にたどり着いた時にはもう、2時間目も終わつてしまつていた。

完全にサボリ確定だ。

どんな顔して教室に入ればいいのか？

何人かには〜ちゃん（担任ね。もうあだなが結構定着してる）に連れ去られるところを見られてしまつてゐる。

これから実行するとして例えばこんなのはどうだらうか？

「おはよう！もう近づくだねえ。みんな元気してるかい？」

「叩きのめすぞ！」

「おううううつうーー！」

（クラス全員で）

……ダメだ。最初からこんな言葉言えるわけがない……。
では、ほんのはどうだらうか？

「あ〜〜朝からサイヤクだつ……」

「皆のものー、かれー！」

「おつかううううー！」

(クラス全員で)

……「うやつでもバッド・ハンドの予感……。もう少しでもなれだなーうんせうじよひ、セツヒヨウ。セツヒヨウしか……ないだろ。

……ぽんぽん……

「うん？ なんだあ？」

「待つてたよ、隆ちゃん。キヤハハハ

「……お、お前……」

そこにいたのは、僕の幼馴染の悠美香だった。

あんまり僕と背の変わらない高身長で茶毛の混じったショートヘア。足は美曲線を描いてスラーとしており、胸は大きくも小さくもなく全体的につりあつていて、顔もなかなかで母親の血をよく引いておりクラスないだけではなく、学校内でも注目を置かれている。しかし皆をよく見下した態度で女王様気取りの十六年来の付き合いだ。それに小中学、高校でも違うクラスになつたことがない。

ちなみに僕の身長は175センチ。体重は…。

「なに考えてんのかなあ？」

なぜか知んないけど、こいつのことについて悪いことを考えたり、言つたりするだけでバレる。

「わてどうすんかなあ？ おばさまから言われてんだよねえ、～～ちゃん」

「なにを？」

だいたいわかつてしまつ。

「万が一に何かしらやばこ」とがあつた場合、対処は～～ちゃん、よろしくつづね

「……」

もう黙つこむしかない。

「いつが言ったことは絶対だから、何されても仕方ない。

これまでやられたことを思い出すだけで、震えが止まらなくなつてしまつ。

「まあ楽しいことが待ってるんだよ

「はいはい」

もう連行されるがままだつた。きょうあと何回連行されるんだろうう…。

もう少し手柔らかしてくれればよかつたものをなんで僕は、こんなひどい目に合わなくてはいけないのか分からない。僕をなんと思つていいんだよ…。こんなクラスにいたら、心身ともにもたねえ。

3時間目が始まり、国語のおばさん先生が入ってきた時の表情と言つたら、もう笑い物だよ。顔が凄いひくついていた。

どうしてかというと僕が原因。

幼馴染によつて僕は初めて『イジメ』というものよりも怖いものを体験してしまつた。

これまでイジメられて鍛えた心身に相当なダメージが…。

「あなた…なんでつるされてんの…？」

現状を言うと、黒板の上に長い棒が固定されているのと、僕の体には大量のひもというひもが巻きつかれている。

そして顔には張り紙がされている。ちょうど僕の目の部分に穴があけられている。つけられる前に見せつけられた。言いたくもない。

『我はダメ人間。この世のすべてのダメ人間を代表する男である

!』

もうクラス全員が悪だよ。誰も助けない。というかみんな大爆笑。先生はとこうと、

「誰ですか、私に対してこんなイタズラして。もつといい加減にしてください。早く処分してください。さあ始めますよ。試験も近いのでスピードアップして頑張っていきますよ…」

完全に物扱い。僕のことなんて目に入っていないらしい。いや、見ないようにしているらしい。

僕がつるされているのがちょうど教卓の上のため、先生が教卓をわざわざズラして、

「では、教科書85～87ページを開いて…」

始めやがった。

先生まで敵とは！もう呪つてやる！こんな世界呪つてやる！

そのあとさすがに授業するのに邪魔な僕は、10分後には解放され、今ではちゃんとノートに[写]している。

この先生の字はこの学校の中でも一番きれいと評判で、あの熱血先生より断然よいのだが、たまに黒板に説明しやすいように棒人間でどんな場面なのか、絵が描かれることがある。しかし、ヘタクソよりはいいのだが…その棒人間の表情を見ていると怖くなってしまう…。

なぜかその棒人間と目が合つてしまつ。それはどこかの席からもじつと見られているように感じる。これはどの人も同じ意見。

この絵が描かれた少しの間、誰もノートに[写]せないため、試験にその部分が出たら誰も答えられない。

「なんで皆さん、私が重要だと言つたところが解けないのでしょうか。もうちょっと私の説明をわかりやすい物にしてあげないといけないでしょうかねえ」

そんなことも発言している。

これ以上グレードアップしたら本当に誰も解けなくなつてしまつ。

ここで先生に助言した方がいいのだろうか？

いや、無理だ…。もつと絵に凝つてしまつて悪化することが目に見える。

はあ…この学校の先生は特殊なのかな…。

「ねえねえ。あそここの部分、ノート[印]してよー。やつじゃなことみんなテストでいい点数とれないんだよー」

隣の須原さんが話しかけてきた。

なぜかその話が聞こえたのか、近くの人全員がこいつを見てきた。どの人の田も希望のまなざしという感じだ。

ちよつと、ちよつとー僕の方から依頼したい気分なんだけど…。

「セーーー！」

「…先生、僕ですか？」

「そうあなたよ、～～さん。早くノートに[印]なこと消しますよ」早く消してくださいよー。お願いしますから。この絵を消していくればみんなだつてノートに書けるんだよ。

あ、そうかそうか…。

「先生描き終わってますんで、その絵を消していくでいいですよ。」

みんながこいつを押およひ的な顔で見てきた。なんかいやな気がした。「やうなのですか…。私の描いた絵がちょっともったいないです…皆わんも消していくでどうか？」

「『はいっー』」

「では、消しつづります。つう…」

ぎやああああー

あの人、絶対わざとだー。なんで絵じゃなくて文だけ消すんだよーみんなも

「ええええー」「

れてと、じつするか…。

今度こそみんながこっちを見てきて、

「神様よろしくお願ひします」

だつてさあ…。

授業終わった後に絶対バレる。代わりに変な文でも書いておこうかな…。お、そうすればまつきの仕返しができるかな?

キンバーンカーンバーン

だつてある…。この時間の終わりを告げるチャイムがなつた。
ガアーネン。

「もうこんな時間ですか。では今日せいいまで。次回はえつと…どうしまじょうか?」

今度の授業で何をするか先生が考え始めた。今の「ひかりやひかりやおう!」

「[J]の部分は結構難しこんなので、ちょっと復習してから進めましょうかな、次の授業」

なんでそつなる! 偽つたことバレちゃう…。ビリよつ…。

「では、終わります」

「『ありがとうございます』」

もう無理だ…。

あいさつが終わった瞬間に「ひかり」みんなして走りこんできた。
怖っ! もうこいや。わあ、どうにでもなれだよ、たぶん…いや…ダメだ、絶対見せない。見せてたまるか!

皆から気づかれないように僕は机の中にしまつ。

「では、やってしまいましょうか、ノート[印し]

幼馴染が僕の顔を見てそう言つた。絶対バレてこむ。顔が一ニヤニヤしてゐし…。もうダメだ。二つの目と向き合えない。汗がダラリ…。

「ウフフ…。まあ見せなさい。見せなすこと何されるかわかつてるよねえ?」

「…」

ダメだ。隠しきれないし、隠し通せない。ここまでなのか…。じょうがないのか? ここで捕まつて連行されてしまうのか?

「ほら早くしなよ。ねえ?」

みんな顔が笑顔から真顔になつた。後ろの方を見るとゾンビ化した奴らまで見える。

なんなんだよ…絶対危ない。危なすぎる。どう逃げ切ればいいのだろ
うか…。逃げ切れるかわからないが、例えば…

፳፻፲፭ በፌዴራል

「まだ大丈夫だよねえ？」

「もうギリギリなんだけど…」

「大丈夫だよねえ？」

「…………はい」

バサアツ

」
?」

「何を考えてたか知りませんけど、見せてもらいますよ」
… ちょっと待て。僕はちゃんと机の中にしまって、体で完全プロッ
クしていたはずだ。いつたいどこから?

普から、考えていいときは周りが全く見えなくなるんですよねえ、あなたは。だから、そんな小細工しないで、素直に出任せばいいもの

そんなバカな。

「『はい!』

もういいつなつたが、逃げるのも！

「さあみなさん、ノートの準備できていますか?」

۱۹۷

僕の後ろにいる人たちが肩を掴んで、無理やり座りなおせた。そして幼馴染が机にノートを叩きつけた、例の何も書かれてないページ

を開いて。

「えっと、このままですね…」

「ひひひひ」

ああ…もう終わった。この後起きるものがもう予測できる。そんなこと考えたくないけど、どうしてか。まあ…。

第1話 第9章（前書き）

続き

第1話 第9章

が終わった後は普通なら昼食＆昼休みだったんだけど、みんなで僕を今度は「マジのリンチにされて体が動かなくて、ほとんどの時間を教室の後ろでうずくまつっていた。

ちなみに誰も助ける奴などいない。

みんなが僕から去った後幼馴染から、

「昔から蹴られたり、踏まれてるときに田が完全にどつかいつているような田をするけど、やめた方がいいよ。みんな引いていたよ…」
そんな田になつてははずはない…とは言えない。やっぱそくなつていたらしい。

小学生3年生ぐらじにそれで笑い物になつたことがあるから。

なんとかして、そつならないように頑張つて対策した。

そのおかげで?なんとか面白がられることもなくなり、暴力でやられることはなくなつてめでたし、めでたしだつたんだけど。
中学生までは言葉責めだつた。

しかしそれもすぐに気にしなくなつていた。ある意味心身ともにタフになつた。

だからヘッチャラ的な感じだつたんだけど、まさか、両方とも今日1日で瓦解されるとは思つてもみなかつた。

なんてこつた…。

そして今日は、食べるものもなくそのまま授業に突入してしまつた。

この後もまだ3時間分授業が残つている。

腹が鳴つて仕方ない。なんとかして腹の音を止めたいんだけど、腹に力を入れるしか方法が見つからなくて授業なんて集中出来なかつた。

「凄い音だよ。どうしちゃつたの?なんか今日おかしそうだよ」隣の～～さんからもそう言われるし、ホントどうかしてるよ、僕。

「オ、ホンッ。今日の授業はうるさい音によつて集中出来ない人もいたと思うが、復習だけはちゃんとしとけよー。」

先生？ 僕のせいですか？

いや、みんな氣にしてない感じだつたけど？先生だけがそう思つているんじゃないの？

「いやあみんな氣になつてたと思うよ。でもねえ、ちよつとかわいそうな氣がしたからみんな氣にしないよつて努力してたと思う」「こ、今度はみんなして放置プレイか？」

「ちよつとはみんなね、さつきのことはさすがにすまなかつたつて。

」

横に来た幼馴染がそつと走ってきた。

これには感動したよ。ちゃんとみんなは良心を捨ててなかつたといふことだ。

「『まさか、ああまでこんな顔をしてしまつとは』だつて。それは私も同感だなあ」

……前言撤回。ただ僕が怖い存在になつてしまつただけか。

「ほら、もう次の授業始まるから、どうにかしてとめなさい、その音

「いや、たぶん無理だと思うんだけど」

「なら」「するの…」

「えつ…」

「」「するんだよつー…」

「グハツツ」

「」「じにつー腹に…腹に蹴りをいれやがつた。

「これで、大丈夫になると思うよ。ありがたく思いなさい」

「いや、なんかさつきに増して腹が痛くなつてきたよつな氣が…」

「うんうん、気にしない、気にしない」

と言つてさつさと自分の机に座つてしまつた。

しかし、最初痛かったのだが割にはすぐ痛みも引いたし腹の音もとまつた。

なんてこつた。

これであいつに頭を下げなくちゃいけなくなつた。
あ、なんでかと云うと昔から、あいつが僕になんか役に立つた場合
礼を言わなくては、このあと暴力かなにかをされるから。
まあとまつた腹の音のおかげで、授業に集中できた。
そういうえは、授業を今田ちゃんと受けてなかつたから、気付かなか
つたけど……。

この授業さあ…昨日も受けてるんだよねえ。それも全く同じ。

6時間目。

例の熱血先生の授業だ。

全然さつきまで気にしてなかつたけど、一応別次元にいるんだった
かな？　いまいち確信が持てないから頭に『？』が浮かんでしまつ
たけど。

そんなに、今までいたところと変わりがなさすぎる。風景はそのま
まだし、人の意外な性格はさておき…幼馴染も変わった気がしない。
まあ、この先生の授業を聞いていても意味がないので、今日一日の
振り返りをノートにまとめてみた。

1、昨日、特にすることもなかつたため、風呂に入り、十一時前
には、寝てしまった。

その時の心情として…また、太つた…。（風呂場の鏡で自分を見た
(時)

2、朝は7時前には起きていた。朝食はいつも通り食べた。ちな
みにカレーだ。お母さんにカレーを出してもよかつたけど、もうち
ょっと寝かしといった方がいい気がしたから、出さないことにした。
ちょうど今日の夜にはいい具合になるかな。

3、 そのあと、洗面所で髪の毛と格闘？頭のてっぺんのアホ毛が寝なくて、十分間の格闘をしてしまった。アホ毛をなめたらあかんぞ。

4、 玄関の前でお母さんに抱きつかれる。はあ…。原因はここからか？ここから僕の人生が狂つたか？このままちゃんと家から出たら普通の生活ができたかも。

5、 ちゃんと親のために料理を作った。スクランブルエッグにソーセージ、フレンチトースト。あの焦がしてしまったスクランブルエッグが忌まわしい。そして珍しく妹を起こさないで出てきた。いつもは大変で仕方ないので今日は幸運だったかもしれない。

6、 徒歩で学校に向かう。弁当を忘れたため、わざわざ大通りを通るはめに。ここでも僕の人生の歯車が狂いだした原因かな？いや、絶対お母さんだ！お母さんのせいだ…。

7、 事故る。これにたいしては割愛するよ。

8、 変な世界で過ごす。どのくらい過ごしたかはわからない。たぶん天国か地獄のどっちかだと思つ。これも割愛。だつてこれはホントに言葉が思いつかない。

9、 そのあと、たぶん第2の人生？なのかな。事故が起きる前の現場に転生されたと思う。というか、そこで今度は事故りそうになる。

10、 もうちょっと、僕はそこで何をしに来たか考えておけば、腹が怒ることもなかつただろう。何という失態！

11、 学校の正門を通して下駄箱にたどり着く。その時は自分のクラスの人たちはちょうど、裏門から出て外を走り始めたらしい。

12、 廊下を走らず、忍び足で教室に向かつた。

13、 誰もいないので、自分の机で寝てしまう。

14、 なぜみんながいるのか、理解する

15、 みんなからわざと遅刻したように見えてしまう気がしたので、対策として下駄箱で偽るつもりが失敗する。すでに下駄箱に何人か生徒がいて、知らないうちに僕の後ろには明日奈ちゃんが背後

靈のようにいたし…。あの時的心臓と言つたら結構ヤバかった。

1-6、職員室に連行される。

1-7、叱られる。全然気にしなかった。

1-8、そう言えばこれ書いているときに返付いたからここに書き留める。僕は決してマゾではない！

1-9、そういうえば、明日奈ちゃんの机に『最近はやりの先生の生徒の接し方』という雑誌が置いてあった。お疲れさんです、明日奈ちゃん。

2-0、これまでの授業での僕についてのことは触れたくないので割愛します。

まあこんなもんだろ？

全く普段通りでないのに、ここにこることが全然気になつていなくて、なんかこの異常なことが『家に帰るまでが～～です』的な感じでありそうで怖い。どうにかして回避したい。

さてどうするかな？ 頑張るしか方法がないなんてありえんぞ！ ある訳がないんだ！ 考えろよ、僕よ。まだなんかあるはずだ。

「お？ 今日はひやんと起きてるじゃないか！」

やっぱり来た。

どうしても僕のことが気になるらしい。もひとつ授業に取り組んでもらって結構なのに。

「その調子で頑張れよ…」

最近思ったのだが、最後は『この調子で頑張れ』らしい…。この繰り返しなら、やっぱ僕のことを気にしなくていいと思うのだが。

「いつもはノート跡をなにかして、珍しくやつてる…。ホント今日どうかしちゃったの？」

いい意味で隣りの～～さんから間違われた。

まあ…いいかな？

「珍しいといふか、今日色々ありすぎて寝れないんだよねえ…

「窓の方も見ないし」

「そんな気分じゃないんだ…」

「ホントどうかしちやつたんだね…」

なんか逆に心配し始められてしまった。

「先生！ 穂積君が調子悪そうです

お、おいおい！ なんだよ。

「うん？ そうなのか？ スマン！ 先生気付かなかつたぞ！ そうならさつき言つてくれれば良かつたものを。先生が保健室まで連れて行つてやるぞ！」

「い、いやいいですって…」

「遠慮するなつて。ほら早く！」

デカイ背中を持つ先生が僕の体を担いでつとする。

ヤ、ヤバイ…連行される！

「先生！ 私が付き添います。だから先生は授業を続けてください」救世主が現れてくれた。いつたい誰なんだろう？

「そうか、悠美香が行つてくれるのか！ それは助かる！」まさかのまた幼馴染か…。まあ助かるのは事実なのだが、礼を言つ回数が増えてしまつのもなんかイヤだな…。

「ほら、早く行つてやれ！」

「は～い。ほら、行くよ。ウフフフ…」

さて何されるかわかつたものじやない。頑張つて逃げるしか…。

「逃がさないよ」

「え？ つて、あれえつ！ なんで手錠されてんのつ？」

「だから、逃がさないつて行つたじやない」

逃げれない。素直についていくしかないらしい。

「はいはい～。お一人様お連れします」

「付いていきますよつ！」

手錠に付いた鎖でどんどん引っ張られる。無理やり引っ張んなくたつて僕はちゃんと着いていくのに…。

「ちょっと2人きりになりたかったから、わざわざこうしたんだよ」そんなことを廊下で話された。何をする気なんだこいつは？

「ねえ、なんだかいつもと違うような気がしてならないんだけど、何かあつたんでしょう？ 言つてみてよ」
そこを突いてくるのか。

言えるわけないじゃんか…。

事故つた事とか話せるわけないじゃんか。
事故つた事とか話せるわけないじゃんか。

事故つた事とか話せるわけないじゃんか。

事故つた事とか話せるわけないじゃんか。

事故つた事とか話せるわけないじゃんか。

事故つた事とか話せるわけないじゃんか。

事故つた事とか話せるわけないじゃんか。

事故つた事とか話せるわけないじゃんか。

事故つた事とか話せるわけないじゃんか。

事故つた事とか話せるわけないじゃんか。

「なんもないから。それに体にも異常ないから、普通に教室に戻つた方がいいんじゃないかな？」

「そんなことを言つてもねえ」。さすがに早く戻るとなんか言われるでしょ？」

「うつ…。あの熱血先生だから絶対に追及していくるだろ」。

「それもそうか…。」

「だからさあ、保健室に行つて暇つぶしでもしよ？」

「それもありかな？」

第1話 第10章（前書き）

いいで、第1話はおわりです。

第1話 第10章

「えつと…先生いますか？」

保健室にて…無音…。

「先生…。…いなにようだね。じゃあ先生が来るまで、ベッドで寝ておく？」

お、おい、誘つているのか？

一応、僕は…男子なんですけど。

「い、いや、いいよ。寝る気もないし…」

「え～え。そう？ 昔は2人で寝たじやん！」

それは昔のことだろうが！

今はさすがに…。

「最近寒いから、2人で暖まつたつていいいじゃない？」

「そ、そんな寒くないだろ！ キヨ、今日なんてぽかぽか日よりなんだぞ！ そ、それに…寒くはないから」

思いつくだけ理由を幼馴染に吐いてやる。

絶対何がある！ ない方がおかしい！ 僕をベッドに引きずり込んでおもちゃにするだけだろうが！

昔からここには寝像が悪すぎて、知らないうちに僕の頭にはここでの尻が乗つかつてたりと、幼い時は酷いことばかりだつた。

「そんじゃあ～私だけでくつろいでいようかな？」

なんでこいつだけ気にしないんだよ！ 僕は今、心臓がヤバいんだぞ。ドキドキなんだぞ！

平静そうに近くのカーテンを閉めて、ベッドに乗つかつる音がした。

「ハッキリ言つて、あの先生の授業詰まんないんだよねえ～。そう思わない？」

もう寝そべったのかな？

僕はと言つと、どこにいればいいか気にしていた。

隣のベッドに座つていののか、それとも近くにある椅子を持つてき

て座るつか。

そんなときじわじわやくよひな声で話しかけてきた。

またも心臓がビックリ。汗も少々。

「ま、まあねえ」

静かな空間で声をかけられると、じつらの声が震えてしまつ。

「さてと…」

一息をついた。

な、なんだ?

「何が原因なのかな?」

ま、またかっ!

「と、特にないんだけど…」

「早く吐いちゃいなさいよ! ねえ?」

「し、しつこいでぞ」

こんなに迫つてくるなよ! 何されても言わない覚悟はできてるんだから

だ…一応だけど。

「氣にするなつて。別に氣になることなんてなんにもないんだから

れ」

「おばさまにも言つちやうけど? 今すぐね?」

それはちよつとヤバいんだつて。

だつて小学生の時もこんな感じで幼馴染がお母さんに連絡したら走りこんで来たのだから。あのときの顔が女優として危なかつた。それ以来僕はなるべく親には連絡してもらわないように、先生たちに頼んだ。しかし幼馴染には通用しなかつた。

「べ、別に車が突つ込んで来たとかないから

「おつとお~? そんなことがお有りで。へえ~」

ちょっと変な風に勘違いされた?

「事故りそうになつて、避けた先には電柱が!」

「そんなことじゃなくて…」

どんどんズレしていく。

「その電柱にぶつかって、頭のねじが一本どつか抜け落ちたんだな

？」

「そんなことある訳ないじゃんか！」

「うん、やうだよね」

「はい？」

「そんな見え透いた嘘なんて、私に通用するとも思つたのか！」
「いや、あなたが引っ掛けたんでしょ？」
カーテンで見えないが、こちらに向かベビシット用を向けてゆつ
な気がする。

「本当のことを言こなさい！」

「せつときからないつて言つてるじゃないか」

「わあ～わあ～！」

「う、ウザい。ビ、ビツク…。面倒だからバラしてしまおつか、僕
よ…。」

……カチャ

「あなたたち…そこで何をしてるの？」

生徒が使う廊下からの扉でなく、別の部屋から繋がっている扉から
保健室の女性の先生が帰つて来た。万事休すか？

「すぐ近くにいるから、声をかけてくれればいいものを。なんか用
があるんでしょ？」

あ、ここに来た理由が暇つぶしだったのはいいが、ちゃんとした理
由を考えるのを忘れてしまつていた。

「え、えつと…実はですね」

「あ、せつこひ」とねえへりむつむ

「はい？」

「大体把握したから。うふふ。先生がこんなところにいたら邪魔で
すよね。あ、どうだい」ゆくつりくつろいでください」「
おーっ！ 先生！ あんた変な勘違いしてんじゃねえ！ そりやつ

て勘違いをしたんだ…

「不純性行為です！早く出て行きなさい。まだ授業中なんだから！」

ぐらには注意しるよ…一番変な勘違いされて困るのはいつなのだから。

「それでは～」

来た扉から少し顔を出してもそんなことを言こやがつた。

「ちょ、先生～！」

ダメだ。でも、あの感じなら他の先生たちには報告はしないだろ。それはそれでありがたいのだが、あの先生にはもづく思われてしまつた。

「…まあ、もづくそろ床わつか？」

「お、おひ～」

ちよつと氣マズイらし。に氣マズイらし。

「はあ～。何にもしないなんて」

「え？ な、なにかな？」

「つづん。なんもなによ。なんも…」

ちよつと頭の中で整理していく、聞きとれなかつた。なんで怒つてんの？ なんか悪い事でもしたか？ ちよつと横顔がブンスカ的な顔をしてくる。

僕はと言えば、なんかもう少しイベントがあつても良かつたのかもしない。

い、いや何にも期待なんてしてないぞ！

「もうそろそろ、授業終わっちゃうね」

氣マズイ空氣を打ち破ってくれたのが隣にいる幼馴染だつた。

「えつ、もうそんな時間か？」

一応、相槌をうつておく。

正直に言つと、話しかけてくれてありがたい。

せっかく話しかけてくれたから、このまま話しておこう。

「うん。もうそんな時間…」

「……」

あれれ？ なんか話が止まってしまった。これって僕のせい？

「……」

「……」

こんな気マズイ空氣はつらい。

廊下を歩いている間、田は彼女の方を向けず、そのまま通りてしまつ。口からは何か話さうとして、「あ～」「え～」などの片言しか出てこない。

全くダメだな、僕よ！

「さつきのことだけぞ…」

な、なんだ？ さつきって、ま、まさか…先生が勘違いしたやつか？ そ、そんなことを追及していくなんて。

「もう、何にも言わないから」

「えつ？」

「別にさあ～大丈夫だから」

「お、おう」

「そんなに気にしなくてもいいから

「そ、そんなんに？」

はあ？ こいつ、先生の勘違いをなんも気にしないで受け流せだと！ ま、まあ元々こいつとは友達として、幼馴染としてそれ以上にはなるつもりはないのだから……。別にいいのかあ…。なんか男として見られてないのかもしれない…。

「どんなに～～ちゃんがね、どんな時でも、どんな場合でも、どんな状況でも、私は隆ちゃんの味方だよ…」
うつ、なんか励ました…。

「あ、ありがとう…。そこまで僕に気を使つてくれて…」

礼の言葉を言つた瞬間、自分の内側でなにかストンと落ちた気がし

た。

「なんかそう言わると恥ずかしいなあ……」
頬赤らめて。

「だ、だからさあイジメられたら、私にいいなよー。今田みたいになつちやうんだつたらさあ……」

「な、なに?」

はあ?

「聞いてなかつたの? もう一回聞かよー。だからさあ別にね、どんなに隆ちゃんが頭おかしくなつたり、イジメられたりして泣いてるときでも私はね、味方だよつて言つたのー。」

「?……えつ?」

「ど、どつちやつたの?」

「い、いや別にね。なんでもないよ」

今度は僕の方が勘違いか……なんで勘違にするようなこと言つんだろうか。ま、全く! 心臓に悪すぎだゼH!
そんなことはさておき、僕はこれから起きることの方に注意しておかなくてはいけなかつた。といつか注意じとじでどつにかなるものかと言つと、それは否である。これには誰にも反論せらつもりはないぞ!

第2話 第1話（前書き）

第2話目

第2話 第1話

保健室にいたころ。

学校正門前。2人の若い男女がいた。学生っぽい。

まだ、授業が終わっていないので正門前はこの2人だけである。この2人、男の方が背が高いためなのか、女の方が女の子に見えてしまう。実際はやはり女の子である…。

「やっぱ俺と相性悪いかなあ？ 実際年齢じや俺の方が年下なのに、お前の方が若いというか幼いの分類に入るからな～。出るところが出てないから、かわいそうに…」

男の方は金に染まつた髪の毛が様になつてあり、後ろで長い髪を結つている。服装は地面に付きそつなぐらいに長いコートを羽織つており、実際の身長以上に背が高く見える。

女の方は、赤を基調とし桃色や橙色の線が入つた着物を着ており、頭には白いニット帽を被つている。和と洋が融合し案外、似合っている

「見た目だけです。別に出ておかなくてはならないところが出てなくとも、私はお淑やかな女性として押し通せることができるのですよー！」

（冷静に対処しなくては！ ここで涙が出たら…）

「まあ～俺にとっちゃなあ、そんなことは気にしないぜ。どこのどいつかがお前に対してそここの部分のこと言つたら、俺にいち早く言うんだぞ！」

「べ、別に大丈夫だよ。き、気にしてないからね…」

めちゃくちゃ気にしているんだけど、言えないよ

「俺はお前のそんなとこが好きなんだから、それ以上は大きくなはるんじゃないぞ！ 大きくなるなあ～大きくなるなあ～」

「な、なんなんですか？ そんなこと言わないでください～。私は大きくなりたいんです！」

「な、なんなんですか？ そんなこと言わないでください～。私は大きくなりたいんです！」

(あああああ！ 言っちゃついました！ 何してんですか、私！)
「お、大きくなないとあなたは私をいつまでも絶対！ 子供扱い
し続けるですから！」

「だ、か、ら！ 僕はお前が好きだからそのままがいいんだって！
「イヤです！」

訴えるために彼の体に飛び込む。

(ここには押し込まなくては！ 引いたら負けです！)
この2人の服装から異様だが、このじやれあいがそれを増幅してい
る。

「お前なあ～。フツ、わかつたよ。出るところは出た方がいいもん
なあ！」

「……えっと… そう言われてもちょっと恥ずかしいような気がしま
すね」

彼女の顔が赤く色づく。

男は依然として笑顔のままである。

いい雰囲気であることから一応言つとくが2人はカップルである。
こんなに熱々であればわからない者はいないだろう。

「さて、そろそろお仕事をやりましょつかねえ？ ここにいるんだ
ろ？ 例の奴」

「今はやりませんよ。こんな人の多くいる前で出来る」とじやあり
ませんから」

2人の雰囲気が以上までに低くなる。

「しかし、静かなところだなあ。何にもないんじゃないか？ こん
な学校に重要人物がいるとは思えないんだが…」

「だいぶ近づきましたよ。朝からそんな気配が漂つていたんです。
だいぶあなたの家から遠いのに感じる事が出来たのですからやは
り、近づいてくるにしたがつてわかりやすくなつてますねえ」

「そなのかあ？ まあ、『お前を頼つて正解だつた』という風に
なりたいよな、やっぱなあ！」

「そうですね。そう祈つてくれてありがとうございます。元気が出ると

「いつもですよ」

「おっ？ そう言つてくれるのか！ やつぱお前が必要だぜ、俺に
とつちやーなあ！」

「私もあなたが必要ですよ。うふふ、こんな良い日々が送れるとい
いんですけどね」

訂正…。何にも変わらない。全然引き締まることのない2人である。
もつひよひとイチャつぐのを抑えた方がいいのではないか？（天か
らのさわやき）

ガツシャーン…「タツ…。

「お、おいつ！ な、なんだ？ なんか始まつてんじゃねえかあ？」
「い、いえつ！ そ、そんなことはあるはずが……」

（ちょ、ちょつと、こ、怖いです（う））

彼の方が怒ったように彼女に向けて言つたため、泣き田になつてしまつ。

「どつちだあ！ 早くしねえとヤバいんじゃないか？ なあ？」
「だ、大丈夫です。い、今のは…違います」

「本当だろうなあ？」

「は、はいっ！ 確信が持てました！」

「おっ？ その確信とやらの理由を言つてみな？ 僕が納得できな
かつたら、お前に『アレ』をやるからな？」

彼女の肩を掴んで上から睨む。

（そ、そんなんに迫られたら、わ、わたし、どつかしちゃうよ）
その日は他の人から見たらまるで鬼でも追い込むよつな鋭い目をし
ている。

しかし彼女はそれに負けないぐらいの涙田で見つめ返す。……あれ
？ どつちの方が強いのだろうか…。

「ま、まずはですね。今のはただの窓が割れた音です。私たちのと
は無関係です。」

「そうなのか？」

「は、はい。そして、私が感じられている『もの』はまだ1種類だけです。もつとも、そんな争いが日中から始まつていれば、けつこう人目にについて私たちの方が危なくなつてしまつます」

「そんなもんかあ～。じゃあさあ、この学校はけつこうヤバいのかあ？」

「い、いや、そ、それはただの偏見だと思つのですが、……」

「よし！ 納得できた！ だからな、さつきはすまなかつたなあ～。怒鳴つてしまつてよお……」

（私は彼のこんな顔が見たくないんです！）

「別にいいんです」

やはり彼にも彼女に対する気持がある。彼女を傷づかせてしまつた、そう思つてくれることが彼女には嬉しいのだ。だから彼女は嬉しそうな顔をして

「最後にそう言つてくれるのが私は嬉しいのです！」

「……アハハハ」

（はい！ この顔がいいんです）

「お前のその言葉、その顔を見るといつも恥ずかしいだらうが

！」

「た、たまにはそういう氣持にもなつてください。いつものよつて私が方のが恥ずかしい思いはしたくないですから」

「そうなるか、じゃあこうだぞ」

急に彼女の頭に手が伸びて、かぶつているものを取つてしまつ。

（そ、そこはあ！）

「ひやあ、そ、そんな、とこは…ダ、ダメでしゅ…」

「うんうん。やっぱかわいいなあ～お前はさあ～」

「だ、だから…ちょ、ちょっとお～ひね、るのや、やめてよお～」

「お前だけの特別な部分なんだから、大事に～大事に～扱わなくち

やあ～！」

「そ、それは、そう…だけど…撫でてくれる、だけで…十分だから

あ…は、はやくう～やめてよお～

「おう～そうかあ。じゃああ～よしよしー。」

(こきなりしてくれるのが、た、たまらない…)

「ひゅう～」

「お、気持ちやすそだなあー。」

「う、うん…あ、ありがとう…」

「でも撫でるのはちょっとむずかしいなあ、」

「う、ごめんねえ…こんなのが…頭になければねえ…」

「そこいいんだって！俺はだなあ！」

「ムツ！？」

いきなり彼が彼女の唇を奪う。

(ええええええええええええええええええ！？)

彼女は最初困ったようだったが、そのうちに気持ちよさそうな顔した。彼女の顔がだいぶ緩くなる。彼は満足してやっと放した。

「うん、いいねえ～やつぱー！」

「……ボツ」

「名残惜しいなあ～！」

「……はい…もう一回ぐらい…」

「さあさてと！ 奴を探しに行こうかあ？」

「……」

「つん？ なんかあつたか？」

「い、いえ！ なんにも！」

ズガズガと大胆に校舎に向かって歩いていく彼にトボトボと彼女は付いていく。

このあと、この学校の生徒たちの好奇心まなざしに耐えられなかつた彼女が倒れ、そこに駆けつけてきた事務員、先生たちに職員室で問い合わせられて、三十分後によつやく外に出ることが許されたことは言つまでもない。

第2話 第2章（前書き）

頑張つてください w

そんな頃、僕はと言いつて窓から投げ飛ばされていた。
「もう死にそうなになることが溢れかえつてしまつてとてもじゃないがやつぱ、僕はそのまんま死んだ方が良かつたんだろうか？
さて、ここまで経緯を説明しようではないか！　もう、そんなことを吐いてないと耐えられない！　何もかも解き放てえ！　……お、ホンッ…。で、では、説明いたします。

保健室から出た僕たちは普通に会話しながら歩いていた。

変な勘違いのせいで僕のメンタルが少し崩れかかっていたときに、彼女は発言通り僕のことを励ましてくれた。勘違いしなければ幼馴染の言葉はとても僕の内側に響いてきて心を泣かせてくれたのに。本当はこいつ、いい奴なのだ。これまで何度も助けてくれたことがあつた。

しかしそれにも勝るほど、僕は彼女に心身を打ち砕かれているのである。なんとかして、打ち砕かれないように努力はした。だが、どうがんばってもダメだった…。

そんなんなかで階段を上る最中、つまり1階と2階の間で最後の授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「あ～あ、終わっちゃつたね。これで今日も終わりつといふことだから…」

時計を見ると四時前だった。

横を見ると、うんうんと頷いていた。な、なんだろう？

「あのわあ～」

「うん？」

階段を登り切つて廊下に達した時

「今日さあ…。私と一緒に…」

僕はそこまで聞こえた。

なぜかとこゝと邪魔する奴が前から現れたから。

「なつ？」

僕の胸近くまでしかない女の子が僕にタックルしてきた。たぶん女の子は授業が終わってすぐに外に飛び出して来たんだろう。彼女はぶつかっても転ばず、そのまま僕をいなすように避けて、そのまま階段を4～5段飛ばしで登つて走り去った。何という身体能力。

「隆ちやん！？」

僕はさつきの彼女のようにはいがず、横に回転してうつ伏せになつて倒れてしまった。

「痛ててて…」

頭にキューイング天使ちゃんが回つている。

こけたらそれなりに痛いはずなのに、それほどでもない。

「ちょ、ちょっと！？」

なぜか下から声がした。どうなつているんだ？

「は、はやく… どきなさいよ…」

だんだんと声が力強くなつていいく。

僕の下には柔らかいクッシュョンがあり、右手の平には何かふわふわな物を感じとれた。もみもみしてみると、

「…ひやつ！」

と効果音付き。そしてなかなかの弾力。

「つ！」

下の物が動き始めて、僕はやつと現状に気付く。

「じ、これはマズイ！」

「早くどきなさいつて言つてるでしょ！つがつ…」

ガツシャーン

気づいた時にはもう僕は空中に投げ飛ばされていた。軽くも重くもない僕の体が幼馴染によつて投げ飛ばされたのだ。先ほど下に引いてしまつていたクッシュョンは、幼馴染だった。どこか

らそんな力が？と疑問にも思ったのだがそれを言葉にしたら今度こそ終わりである。まあ今は言つてもいいかなあ？死にそうだし…。

「なんで今押し倒すのよお～」

飛ばされていいる最中に幼馴染の顔が見えた。

数年ぶりに見た本気泣きだ。

ちょっと冷静になつてみる。こんな状況でも冷静になれる僕はスゴイ！…いや、このようなことがありすぎて慣れてしまつたのか…。それはさておき、考えたのだが、僕は倒れた時に彼女のある、手に収まるほどのもの触つてしまつていたらしい。もう一度手で確認。うん、触り心地抜群！ありがとう。僕は最後に初体験を味わえたことに感謝感激です。では、さよなら～。

と行きかつたがもう1人誰か知らないが見てしまつた。目が合つてしまつた。

幼馴染のいる階段の上り側。ちょうど落ち始めて幼馴染の顔が見えなくなつた瞬間、斜めになつたから見えたのだが表情が笑っていた。あざ笑うと言つた方が良かつたな。

とにかく僕はちゃんとその子の顔をじっくり覚えることにした。死にそうになつてる奴を見て、そんな表情をしているなんていつたいどこのどいつだ！

ドスン

後で幼馴染から聞いたがこんな感じの音が学校内をごだましたといふ。

頭からではなく、背負い投げのような感じで背中から地面に打ちつけられたため、死ぬことはなかつた。だが、痛いのには変わりはない。やっぱ死んだ方が楽なんだろうか。

それに落ちる前に記憶しといたはずのあの子の顔が思い出せない…。ただ笑つていただけしか思い出せない。強く頭を打ち付けたのか？

そんなはずはないのに。

さて僕は一回保健室にまわされ、包帯を巻かれた。特に頭。

なぜかというと幼馴染が

「隆ちゃんの頭からこれ以上、ネジは抜けさせないんだから…」
だそうで…。

しかし、僕は特に痛むところも悪いところも全くないのである。こんな状態で帰り道を歩いていると出くわす人たちから見られて恥ずかしくてたまらない。

「ホントに、ホントにごめん…」

「別にいいんだって。痛くないし」

さつきからこの調子である。

「ねえ～2階から落ちて打ち所が悪いと、死んじゃうんだよー。一回精密検査しない？」

「だからさあ～もつ大丈夫だから。だけじゃあ、僕も悪いことをしたからなあ」

幼馴染は僕を投げ飛ばしてしまったことを後悔し続けている。しかし原因は僕のせいだ。押し倒してしまったのがいけないので、そこまで謝られると氣のいいものではない。

「その…ごめん」

「えっ、な、なんのこと?」

なんか顔が赤い。

「お前が僕を投げ飛ばす前だよ。覚えてないのか?」

「な、なによ? そ、そんなことなかつたでしょ?」

なぜかそっぽを向いた。もしかしてこいつ…。

「お前さあ～覚えてるだろ?」

「うんうんうんうん、全然!」

絶対怪しい…

「まあいいや」

なるべく気にしてないような態度をとる。ここつの態度を見るとおもしろい。だけどまあ今回はこの辺でいいか。

「覚えてなくても、一応謝りとくよ」

「ふんっ！」

別に『ふんっ！』はいらぬだろ？が！

「…病院に行かなくてもいいから。そこで、そのまんま家に帰るから。あ、そういえばさああ」

ちよつとしたことを思い出した。

「今日わあ～お母さんが休みだつて言つてたから、たまには一緒に「はんとかどう？」

これはいい案だと思う。この機会に仲直りでもひとつかなと思つたまには使えるお母さんである。

「おばさま、今日休みなの？」

「だからねえ、じかうでもしようかなと思つてしま」

意外と僕は昔から両親のためといつより、自分自身のためと言つた方がいい。とにかく料理がうまいものを作れた。だいぶ最近ではシエフが作るようなものを試すようにもなった。

「前よりも腕は上がつたんでしょう？」

「これには自信たっぷりだよ！」

「あのさあ～たまに見せるその自信たっぷりな顔を私に見せないでそ、そんなあ～

「じゃあ、ママに連絡つと

携帯をとつだして

「……ママ、あのとあ～…

話し始めた。

そのころ僕は幼馴染の横で心にグサッと刃が刺さつてしまつて立ち直るために必死だった。なんとかしてこの時間で立ち直つてやる！

「うん。わかったよ…い、いや！ ～～ちゃんが誘つてくれただけだつて！ エ？ 今日こなはって？ そんなのあるわけないでしょ

！」

いつたい何の話をしているんだ？

そういうえば、まだ言ってなかつたが彼女のお母さんは僕のお母さん

の双子の妹の喜里子。つまり、僕と彼女は幼馴染であり、従姉でもある。

昔から僕たち家族は、共に過ごしてきたといつても過言ではない。家は隣同士。お母さんたちは姉妹であり、お父さんたちは非常に仲の良い幼馴染である。なぜか知らないが誰が見ても仲良しなのに、この2人は絶対そんなことを認めない。

僕たちは一人の両親に本当の子供のように育てられた。お母さんたちは仲がいいのに。

前に聞いたことが、お母さんたちを同時に好きになつた父親一人は勘違いして同じ人を好きになつていたと思っていたらしい。だから告白時、下駄箱に手紙を入れて、同じ場所に呼んで、同時に告白。

告白の言葉も

「『ぼ、ぼくの』、ことを…好きになつてくださいー。」「『?』」「『?』」

お母さんたちはそのときあまりにもおかしくて、いきおいで承諾してしまつたんだそうだ。この話を父親一人に言つてやると顔が真っ赤つくなつてとってもおもしろい。

「もう~。うん…うん、わかつた。じゃあお願ひね」「どうにかして話がまとまつたらしい。

「じゃあ、早く準備するために帰らなくちゃ」

「いいえ。一応、ママは買い物するんだって。だから家じゃなくてこっち!」

こいつのお母さんは、僕のお母さんの何十倍も役立ってくれるから、どちらかといふと僕はこいつの親の方が好きなのである。

「ほらほら、早く!」

元気が出てきた幼馴染を見ているとこっちも元気が出る。

さて、お母さんと連絡を取ると、開店時間から今もショッピングモールにいるらしい。もしかしたらばつたり会ってしまうかもしだい。

そして偶然なのか、双子の意思疎通なのか彼女のお母さんはそこに行きたがっていたらしい。なんで2人して新しい物好きなのかなあ？僕は普通の商店街の方がいいけど。

「ちゃんと車で来てくれるから、色々いっぱい買えるよ！ 早く行ってなんか買わない？ 冬用の服とか」

「まあまあ。そう焦るなって！ 時間はいっぱいあるんだからさあ女の子のこんなはしゃぎ方には、なかなか男としてついていけない。理解はできるけど何と云つか、男とはまた別の感動があるんだそうだ。

でも、いつも学校で見せる強気な態度より、こっちの方が話しやすいし楽しい。昔のままが一番だな。

走つていった彼女に置いてきぼりになつた僕は、信号が赤になつて立ち止まる。

ちょっと運が悪い。

言つとくが立ち止まつたことに運が悪いとは言つてない。この交差点で立ち止まつてしまつたことが僕の不幸だと思つ。

そうこには、例のコンビニ前の交差点なのである。

なんでこんな不幸なところで立ち止まらなくてはならないのかわからぬ。

向こう側で幼馴染が手を振つてる。

「早く！」

「まあ待てつて！」

信号を確認してみる。横の信号はまだ青だ。

そして僕はそのまま幼馴染の方を向けばよかつた。見てしまつた。

見なければよかつた！人間、何となく見ると言つことは、周囲も何となく見ることになる。

横の歩行者信号の下には朝に会った女の子がこちらに向けてこつこりとほほ笑んでいた。いや、にっこりじゃないな、アレは。あざ笑うかのようだつた。

この顔どこかで見た気が・・・

僕は彼女をじつと見た。彼女は笑いを向ける。信号は点滅し始める。聞くには今がチャンスだろう。

「ちょっと君！待つてて！」

どうしても僕は聞きたかった。なんかあるんじゃないかと思ったから。僕の人生が変になり始めた原因になつてるんじゃないかと。いや、人に押し付けてるわけではないんだよ？しかし僕は不幸だ。

僕は特に気にしないまま、車道で飛び出していた。もつと気にしようと自分に言い聞かせたい。パトカーのサイレンが鳴り響いているのに。

横を見ると一台の暴走車が僕と一メートルの地点にいた。避けなくてはいけないから、地面に足が付いている方の足に力を入れる。

たつた一回の足のけりでかけぬけようと思つた。

ズルッ。

な、なぜだあ！なんで石が！

大きくはないが、石が道路にあつて知らないうちに踏んでしまつていた。そして変な風に足が曲がつてしまつたため、力が入らずそのまま前に転ぶ体勢となる。あと一メートル。

前方では女の子がこちらに向いて口を素早く動かした。

「やつぱあなたダメね」

だとさ……。う、ウザ！生きて帰つたらぶつ飛ばしてやる！

といふかそんな場合ぢゃない！僕はあと少しでさつき見たが、泣

きまくつてゐる運転手の男に轢かれる。

だれか！僕の手を誰でもいいから取つて引っ張つて！

「了解しました」

へつ？ 前を向くとそこにいたかのよつて、ブラックのスラックスを穿いた女性が立つてゐる。

しかし、さつきの声は直接脳に響いてきた。実際にそんな言葉を發してゐる間に僕は引かれているから、ほんの一瞬だつたのだと思う。誰だ？ この美人？ いや、足しか見えてないけど美人だと予想できるほどの美しい足だつた。

「では、お助けいたします」

グワッ！？

「なんで投げるんだよ～～～～～～～～～～～～～～～～

まず、上に放り投げられた僕は、下で起きていることを眺められた。放り投げられたと言つてもセダン車の屋根1メートルほど上にしか上がつてなかつたが。

女性はどこからともなく、一本の日本刀を持っていた。

片方は屋根部分を削ぐ。

もう片方はタイヤ部分に軽く当てている。

車は走り去つた後、屋根をその場に残し近くでスピンして電柱に当たり停止する。

僕はその場に浮いていた屋根に乗つかり微妙なクッショーンとなつて地面に落ちる。

今のは衝撃で少し腰が痛くなる。しかし、何とかして立つ。

「大丈夫でしょうか？顔に擦り傷だけ見受けられますが、他はどうでしょうか？」

さつきの女性が話しかけてきた。

「暴走車も停止させることにも成功しましたし、一挙両得といつものです。」

僕はこの人に助けられ、暴走車も停止させることに貢献させてしまった。凄すぎだよ、この人。でもこの人、僕の名前を言つたよな？ なんだだ？

そう言えば、あいつは？ あいつはどこに行つた？

周りを見回すと、暴走車を取り囲んだ警察官が警察を取り押さえている。そしてパトカーのサイレン音を聞きつけた野次馬が群がつて来た。

女の子がいた場所はすでに群がつた野次馬によつて見えない。それともすでに、どこかへ行つてしまつたのかもしれない。

「お困りのご様子ですが」

まだいたのか！ 全然近くにいても気配がない。ホントなんなんだ、この人。

そういうえばちゃんを見ていなかつたのか、目は少しつり目ではあるがアゴはシャープ、長い豪華な髪をカールしており、大人の女性が引き立てている。

「あなた様がお探しになられている者はこちうで把握しております」「ど、どういうことなんだ？」

「私が先ほどから注意していますので、こちらへどうぞ」

僕の手を取つてグイグイ引つ張つていぐ。比較的野次馬の群がつていないとこをを選んだのか、すんなりその場から抜け出すことができた。

それよりも僕はこの事故をこの人のおかげで切り抜けることができたのだが、被害者ではあるのだ、一応…。今も腰が痛いし。

「腰など気になさらず、行きますよ」

「ちょ、ちょっとは気にしてほしいんですけど…」

「そんなことはどうでもいいんです。早くなさらないと、あの方が逃げてしまいますよ？」

「が、がんばりますから、もうちょっと遅くはできませんか？」

「それは無理な申し出ですね」

本当に気にするそぶりもない。それにしてもだいぶさつきの交差点から移動したものだ。どこまで移動するんだ？

「どこまで移動するんですか？」

「もうそろそろです。もうそろそろ追いつきます。もう少しの辛抱です」

そのよつて言われて、たどり着いた場所には、女の子の姿が見えない。

しかし、周りを見回すと幼馴染と買い物をしに来るつもりだったショッピングモールがすぐそこにある。周りにその建物以外は全くない場所で、少女を探しに来たというのにいったい何しに来たつて言つんだ？

「本当にここ何ですか？ ショッピングモールなんかに来てしまって…」

「正確には違いますが、目的地はここです。～～ショッピングモール第3駐車場」

近くに縦横に大きいショッピングモールなので、第1駐車場に自動車が収まってしまう。なのでこの辺一帯の駐車場には自動車は停められていない。ただ広い空間が形成されただけとなってしまっている。

「ようやく来たね」

後ろから声が聞こえた。入口からのようだ。

「遅すぎにもほどがあると思うんだけど」

聞いたことのある声だ。

「周りに人気もなさそうな場所と言つと、ここしかなかつたんだ。
別に森の奥まで入つても良かつたのだけ」

振り向いてみる。

「さて、そろそろ私はやらなければならぬことがあるから、隆明
には手伝つてもらつよ」

そのまんまだ。先ほど見たのと変わりのない雰囲気を醸し出している。
あざ笑うような微笑みも今もしている。そんなに顔で名指しで
言われるなんかイラッとしてくるなあ。

「どこから話そうかあー。どうする？」

僕じゃなく、横にいる女性に向けて言つた。

「自己紹介からどうでしょう。例えばどんなに頑張つても背が伸び
ないとか」

「な、なななにを言つてゐの?..」

完全に真っ赤つかだ。

「や、そんなことは気にしなくていいからね? とにかく私の名前
は伊豆那よ」

彼女はそう名を告げてきた。見た目は小学生。髪は後ろに垂らし、
頬はまだまだブーブーしている。まだかわいいの分類から離れられ
ていないのか、美少女というよりハキハキした女の子に見受けられ
る。

それになりより、朝この世界に来て初めて会つた女の子と全く変わ
りがない。そしてさつき、横断歩道で見た子と同一人物。しかし顔

は、前にいた世界で最後に会った女の子とも変わりがないのだが、雰囲気が違う。どうしようか？ 僕は彼女に聞いていいのか？ さつきから知らんぷりしているのか、満面の笑みだ。

「私も申すのを忘れてました。エイルです。どうぞよろしくお願ひします」

なかなか自己紹介する暇がなかつたから今よつやく、この美人の名前を聞くことができた。彼女は無表情を貫いているし、言葉も固い。だけど、彼女のような人はミステリアスで興味をそそられる。それで僕は今、彼女の名前が聞けて、ちよつぴり今日は、運がいいかもしない

「え、え」と僕は

少し恥ずかしくて、なかなか自己紹介にいい言葉が見つからない。こういう時こそ男を見せる、僕よ！

そんなつまづいている僕を見かねて女の子から

「隆明でしょう？」

「えっ？ 何で知ってるの？ 僕はどうかで名前言つたっけ？」

ハツキリ言つて、覚えがない。

「どうして知つているんだ？」

「まあ、すこし言うのがね…控えときたいなあつて思うんだけど…」

「別に言いたくないんだつたら言わなくともいいんだけど…」

隠したいことは人間にはあるんだから、そこは僕も気にしてあげる

「伊豆那が言いたくないことはですね…ふう…」

エイルさんが一息つく。ちょっと重たい雰囲気が漂う。なんなんだろ？

「は、はい」

「それはですね」

間を開けて

「ずっと隆明様のことを…観察してました…」

「……」

ま、まさか…

「……えっとそれはつまりそのへス、ストー」

「ストーカーではありますんつ！」

僕がいい終わる前に割り込んで来た。美人が顔を真っ赤にして『ストーカー』と叫んでいるところを見るところちらがね…少し恥ずかしくなつてくる。でも、まだ名を聞いて1分。すぐさまこんな表情を見ることができるのは。

それよりも、

「で、でも、なんで僕なんかを」「い、言つ訳がありませんっ！」

拒否された。

「じゃ、じゃあ…聞きませんけど」
たぶん僕のことが好きでストーカーをしてたわけではないと思う。
だから聞かないくていいと思う。これ以上みてているのもなんだから。
「そ、それも困りますつ！」

ハアアアア？

「なんか言つてることが逆さまなんですけど？」

もう顔の穴という穴から蒸氣が出ている。この表現には間違いはない。だ、だいじょうぶか？

「ここまで赤くなつたエイルさんの顔、初めてみたよ！ とつてもすごい貴重な体験ありがとつ！」

誰でもそれに同意じやあないだろうか？ こんなに美人の顔が変わることは思つてもみなかつた。僕にもとても貴重な体験ありがとつ！
「なに、2人して笑つていいんですかあ！」

声が裏返つてしまつほど、恥ずかしかつたのだらう。さつきのことは謝つた方がいいのかもしれない。でも今の状態がかわいいからもう少し。

「も、もう言っちゃいますっ！」

「言えることだつたんですか？」

まさか、逆ギレした流れでポロリ吐くつもりじゃないだろうかと思つて、すかさず突つ込んでく。

「そうですっ！ タフキの流れであんな風になつてしまつたのですが！ 今言わないと隆明様に不幸なことが降りかかるてしまうので、早く言わなくちゃいけないんですっ！」

「ふ、不幸？」

妙に引っ掛かる言葉を聞いてしまつた。

「覚悟してください！ 少し待ちます！ ……いいですか」

「えつ……」

「ちょ、ちょっと待つてください！ 早すぎです！」

「いいですよね！」

全く聞いてねえ！

「隆明様はこの世界の人間の中でも不幸の分類に入り！ あなたはその分類された人たちの抽選で当選されてしまった人なんですよっ！」

「言葉の意味がワカリマセン」

「どういうことだ？」

「それはそうだろうね」

僕の顔を覗き込んでくる少女の顔を見ると、何かイライラしていく。その顔やめろつつの。その顔！

「簡単に説明するとね…あ、休んでいいよ、エイルさん。よく頑張つたと思うよ、私のために。ウフフフ……」

「…笑わなくともいいのではないですか…。えつと、お言葉に甘えて…」

ブシューという音がして、この駐車場の入り口近くにある自動販売機に向かって歩いていく。肩を落としてしまつていて。そんなに嫌

だつたのかなあ？

「じゃあ、話の続きね。まず私たちの存在からけんと話した方が良かつたんだろ？ まだ自己紹介もちゃんとしてないからどうかな？」

「なんか言いづらい」とでもあるの？」

「そういう訳じゃなくてね。お兄さんが聞いててもあまりおかしくない、簡単なことから話したいんだよ。私たちは特殊だから、小さい子に難しい話をされるらしい。小学生から高校生である僕が教わるのって、いったい何の恥さらしなんだろうか？ それに僕はバカではない。頭がいいわけでもない…。

「簡単なことって言いつて、どのあたりのこと指すの？」

「うーん、そうだねえ…」

だいぶ考えてている。そんなに難しいのか？ 別にこの子が考へていることは案外自分にとつてなんの変哲もないことだつたりするんじゃないだろうか？

「じゃあ初歩から」

「うん」

「隆明は宇宙人や神や悪魔が今この世界の前にいてもおかしくないことを知ってる？」

前言撤回。うん、難しいね。無理だ。僕の頭ではカンガエラレナイ

三へ

「おーい？ 大丈夫？ うーん、もつと簡単なことあつたかなあ？」

だいじょうぶじゃない…。そんな言葉をもつと冗談ぽく、言つたつていいいじゃないか！ なんでそんな真面目な顔してんだよ…。

「学校でも見たけど、その顔はマズイよ…。早く戻つてきてよ～～」
今の言葉は聞き取れたぞ！ 理解もできるぞ…。今の顔がヤバいこと。

と。

僕の今の状態の顔つていつたいどうなつているんだろう。今日幼馴染からも注意されたが、相当なアホ面に決まっている。彼女の顔の方を見ると、憐れんだ顔になつていて。ち、ちくしょー…。とか、なんで知つてるんだ？ まあいいや。

「あ、戻ってきたようだね？ 理解できた？」

「まあ、僕の顔が本当にマヌケな顔だということだよな」

「そ、それもあるけど…。そっちじゃない…」

「宇宙が回つてる~」

「ダメだこりゃあ」

『冗談を言つただけなのにさあ。『もうダメだこいつ』的な顔しなくてもいいじゃん！』

「で、宇宙人が何だつて？」

「宇宙人が重要じやないんだけど、まあいいかあ。 变な例えをし

た私が悪かつたかなあ~」

「どれが重要なの？」

「もうちょっとランク上げるけどいい？」

「どんとこいや」

体に力を入れる。どこからでもかかつてこいー

「『私は神様の種族に分類されるものだ』と言つたら？」

「そんなはずがない！」

「…別に即答しなくてもいいんじゃないかな？」

今度は正常状態での完璧な解答だつた。これで僕はバカではない。どんな奴でもバカと言わせないぞ！

「本当のこと言つてるのに、全否定されちゃたら~私も困るんだけど…。もしかして…あなた本当は、相当なBAKAKAなんじゃないの？」

な、なぜだ…そんな…『バカ』を回避してくるなんて。ち、ちくしょー…。

あ？ 知らないうちに自動販売機で買ったのか、缶3本を抱えて「さんがこちらに歩いてきた。もう大丈夫なようだ。

「けつこう大きな声での会話でしたね。なので私も良く会話の内容を把握しました」

この少女の話を唯一理解しているのかもしれない。もつと簡単に僕に説明してください。

といふわけで、

「どんとこいや」

「では、私のことですが、本当の姿は天使です」

「あなたはまるで天使のようだ」

「……ポツ」

えつ？ な、なんの音？

「あ、あの～お兄さん？ 変なこと口走ってるし… といふか、二人とも！ なんか頭から湯気が！」

変なこと？ 僕は今なにか変なことを言ったか？ なんでそんなに～、慌てているのかわからない。

「そ、そんな…恥ずかしいことを…言われましても…あああああ！」

「ちょ、だ、大丈夫、～～さん！？」

背筋を伸ばしたまま後ろに倒れそうになつたのを地面スレスレで少女が支える。この構図、2人が逆だとかつこよく決まるんだけどねえ～。

なんかというか、倒れている～～さんの顔を見ていると、いつもの表情と違つて案外かわいいんだね、天使の～～さん。

「天使のことだけはちゃんと信じるんだね」

ああ、今そやつて失神している、あなたのその柔らかい谷間にダイブしたくてしょうがないのです。

「それだけはやめといた方がいいよ！ 隆明！？」

その柔らかそうな唇、柔らかそうな谷間、ワシジカミ出来やつなお尻を僕はあなたから奪い去りたい！

「隆明っ！ な、なにケダモノみたいなこと言つてるの！？」

さつきからうるさいなあー！ 僕はこの天使ちゃんと2人で一生過ごすんだ！ グヘヘヘヘヘ。

「だ、ダメエエエエッ！」

愛しているよ♪ ミュ～

グハアツ？

「な、なにをするんだ！ 突然殴るなんてひどいじゃないか！」
地面に～～さんを寝かせて、わざわざ立つて頬を殴つて来た。そ、
それもお前、ちょ、頭から湯気がつ！

「キリストは言つたのです。『右の頬をうたれたのなら左の頬も差し出しなさい』と」

「そ、それがどうした？」

「ほら、早く出しなさい！」

グハアツ？

「出す前に殴られるつておかしくないか？」

左の頬を素直に差し出そうと思つてやろうとしたのに！

「そんなことはどうでもよかつたの！ 今、私が隆明に言いたいことは、ただ一つ！」

「なんだよ…」

なんだよもう…。なんか神様を氣取つてさあー。子供なのに。僕は小さい女の子には興味がないの。やっぱ美人がいいよなあ～

グハアツ？

「言つとくけど妄想がただ漏れだよ？ それにキリストはこんなことでも言つたんだよ！ 『両頬を殴られたら全身全靈を使い相手を受け止めなさい』ともね！」

「それは聞いたことがないんだが……？」

僕は疑問に思つ。こいつただ単に僕を殴りたいだけじゃないか？

「どうか、だだ漏れつてどうじうこと？」

「やっぱ自覚ないんだね……」

さつきから僕は普通にエイルさんのいじじりを考へてたけど、だだ漏れつてどういうことだ？

「どんなこと言つてた？ そんな変なこと言つてないよな？」

「ちゃんと真似して言つてあげる！ 『天使ちゃんマジパネH！』

だそうですけど！」

「ギヤアアアアアアアッ！ そんなこと、頭で考へてねえええええっ！」

こいつ嘘を言つてんじゃあねえか？ なんで僕がそんなことを？
おいおいそんなでっち上げた嘘を言つんだ？ ……といふか、本当に僕がそんなことを言つてたら？ なんかヤバいんじやないか？ 世界から抹消されてもおかしくないんじやないか？ おいおい、どうすんだよ、僕よ！

「なんか急に狂つたように話し始めたから、ホントに隆明がダメ人間確定しちゃつたんじゃないかと思つたよ」

「言つてない 言つてない 言つてない 言つてない

僕は自分を信じるよ！ セめて僕自身だけでも！ 僕だけが僕自身の本当のことを知つてるんだ！ 絶対そうだ！ 絶対……。

「はつ！ 私、いつたい……？」

「あ、大丈夫？ ハイルさん」

スゲエ。いきなり九十度に曲げるなんて。

「なぜ私は地面に寝てるのでしょうか？」

「まあ色々あつたんだよ」

「伊豆那。どこまで話したのですか？」

「ぜんぜん話してないんだよ…。あんまりにも隆明がバカだから
ちょい待てよ。こんな話をすぐ理解できる奴なんてそういうない
んじゃないか？」

「そこはバカって言わないでほしいんだけど。でも『メン。たぶん
頭がパンクしてたんだと思う。今思い返すとね』

あんまり覚えがないけど、僕のせいでエイルさんが倒れたと思うから、一応嘘をついておく。

「やつとわかつたんだ！　さすがにあんなに恥ずかしいこと書いて
おいて顔が赤くならない隆明は、どうかしらイカれてるのかもね？」

「おい！」

せっかく謝ったのにそんなことを言われる筋合いはないんだけど…。

「そんなことより早くした方がいいのではないでしょうか？　ここ
に長居してしまつと隆明様の生活がありますので」

「それもやうだね」

「一応、私たちの正体はわかつたよね?」

「神様と天使ね」

信じていいのか分からぬけど…。

「次にですが、私たちがなぜここにいるかです」

「もう、面倒くさいから全部言つちゃつていいよ」

「伊豆那。いいんですね。あなたのあれやこれやを言つてしまつても?」

「言つたな! そんなの抜いて早くしてよー!」

「そんなに怒らなくともいいのでは?」

この人。そんな無表情で冗談を言われても、口からだけが困つてしまふんですけど…。

「まあいいです。最初から簡単に説明しますので、真剣に聞いてください。そうでないと先ほど言つたように本当にあなたが困ったことになりますので」

「は、はい」

そんなことを言わるとピシッと聞かなくてはならない気がしてしまつ。

「伊豆那のいる神様の世界でなぜ抽選したかというと、伊豆那のためなのです。伊豆那は隆明様のためにこの世界に来たのです。隆明様は『不幸児』として生まれたのです。『不幸児』とは、ハツキリ言つて不幸ばかりの人生を送る人のことです。そしてこの世界には不幸児のついとなる、幸運児という種類もいましてこの世界にはどちらも必要な存在なのです。しかし、これは二十歳ぐらいまでのこどものでそこまで気にすることはありません」

一息つく。今のところほとんど分からぬではない。

「しかし、たまにどちらかが多く生まれてしまつことがあるのです。数十年に一度くらいなんですが、この状態になり始めますと、

もうだいぶ現神様の力が切れてきているのです

「その展開だと、もうそろそろ今の神様の力がなくなく始めているということですか？」

だいぶ、頭が回り始めた。

「はい、そうなんです。なので、代わりとして次期神様を育てなくてはならないのです。それで今回、次期神様候補として伊豆那が選ばれたのです。しかし候補であつてまだ正式になることができないのです。どうすれば良いかというと、人間と同じように実績が必要になるのです。その実績がそのまま影響するのです。その実績とはこちらの世界で、自分の頭を駆使して何か人間のために成し遂げることで評価されます」

なるべく難しいことを話さないでくれているのか、樂々わかることができる。いや～～ホント助かります、エイルさん。

「じゃあ、何をするんですか？」

「私たちは今回の神力の減衰によつて増えた不幸児である人の人生を変えることを伊豆那が考えたのです」

そんなことをこいつが？　伊豆那の方を見ると、そっぽを向いている。まあ…いいか。

「そのため、不幸児の人たちを抽選して当選された隆明様の人生を変えて幸運児にしようと考えたのです。」

「変えることはできるんですか？」

「実際にはやつた者もいるので大丈夫でしょう」

「はあ～？　えっと、いつから僕の人生を変えているんですか？」
もしかして……。

「隆明様と決まつたのは約1週間前です。しかし、私たちは隆明様を主観としたら、一昨日前から観察を開始。今日から行動をしていきます。たぶん気づいてるのではないかと思いますが、あの事故からです」

「やつぱそつか…」

何となくわかつていた。なぜなら、今日から僕の人生がめちゃくち

やになつたから。どうみても死にそうになつたり、死んだり、色々ありすぎたと思つ。

「しかし最悪ですね。あの事故で僕は1回死ぬんですよ？　あの事故がなければ僕はこの日常が平穏に暮らせたのに。そこで助けてくればよかつたのに」

「そなんですよ。私たちはあそこで隆明様がこの子を助けて、とつてもハッピーな日常を暮らしていくとも聞いたかったです…まさかあそこで本当に事故に会うとは思つてなかつたので」

「おい！　仕掛けたやつらが把握してなくてどうするんだよ…ヤバッ！　なんか口から出でているし。

「まあまあ、熱くならないでください。それですね、さすがに死んでもらつては困りますので時間を少し巻き戻させてもらいました」「時間ですか…？」

「はい。時間をあの事故を起きた前に戻させていただきました」「んっ？」

「まさかですが、今僕がいる世界は元いた世界とは違いますよね？」「いいえ、別に転生したわけではありませんので元いた世界のままですが」

「そ、そんなあ～～！」

「こうことは…。誰も変わつてなかつたことになる。クラスの奴らの本当の裏側を見てしまつたことになる。そんなバカなあ～～みんなあ～～！」

「そして、すつかり忘れているのか知りませんが、私たちは今日が始まる時にも、この世界全体にあることを仕組んでおいたのです」「あることってなんですか？」

「世界全体に？　えつと…そんなに大きすぎる」となんて僕にはわからない。わかるはずがない。

「自分自身に起きたことが印象に残りやすいのはわかります。しかし、私たちは時間を戻すことができたのです。何か疑問を持つてもおかしくないのでは？」

こんな時に考えてしまつのもなんだが。

「疑問と言えば、本当に神様は万能なんですか？」

「難しい質問ですね。これについては答えません。答えたところでまた～～様は理解できないと思はれます。そして今現在の話がズレてしまつています」

「エイルさん。内心は『そんな質問考えてないで、もうけよっと人生を見つめなおせ！』あ、でも、見つめなおせるほどちゃんと人生を生きてないからわからないのは当たり前か？』だそうですが？」

「ホントすみません…」

全く黙りですね…。

「そんなことは思わなくていいです。それでですね、さきほどの答えですが『時間のループ』です。意味がわかりますか？ 言葉そのままの意味です」

「ちゃんとわかってますから大丈夫ですって…」

ん？

「…ということは、今僕のことを不幸に叩きつけているのはあなたたちだったんですねか！」

「まあそういうことです。しかし、すみません。なるべく私たちも裏で頑張ったのですがなぜか不幸が連續して起こつてしまつのか分からぬのです。変えることができるはずなんです」

本当にそうなのか…。なんか引っ掛かるんだよな～あつ～

「それでなんですが、疑問があります」

「何でしちゃうか？ なるべく意味のわかるように言つてください」

「ちゃんと言わないと怒るつてさあ～。ミスらないでね？」

なんか、質問しづらくされた。困るんですけど…。

「…えつと～～なんで僕のために時間をループさせてるんですか？」

「それはですね…」

「その話、俺たちにもわかるぐらいに簡単に話してくれないかあ～

?
「

この駐車場の入口の方を見ると長身の男がいた。まるで今までずっと
といったかのような雰囲気が出まくっている。

第2話 第6章

「今、俺の注目ワードは『時間』、『戻る』、『能力』なんだよねえ！」

なぜ、ピンポイントに注目ワードが僕たちの話していたことと合ってるんだ？ もうきの話を聞いてたよな、この人。

そんな見え透いた嘘をつかなくてもいいのに。

「えつと、一応聞いたくけど…あなたたちはいつたい何者？」

長身金髪男の異常なほどの雰囲気に圧倒されながらも「が聞いてみる。なんか別に無視しても良かつたんじゃないだろうか？」

「うん？ おれかあ！ 僕はだなあ！」

「言わないでえつ〜〜！」

な、なんだアレ？

「む」あえだうえぎ

「はあ～はあ～はあ～」

長身金髪男の後を追いかけてきたのが、着物を着こんで頭にはかわいい白いニット帽を被っている。少女が走りこんできて必死に後ろから男の口元を手で押さえこんだ。というより彼女が必死に飛び込んで彼を押し倒してしまつ。男の方は不意打ちだつたために顔向けから倒れて受け身ができてなかつた。痛そう…

「なんで先行つちやうんですかあ！ はあ～はあ～はあ～

「お前に放置プレイをしようと考えたからなあ！」

「や、やつぱわざとだつたんですね！ ハア～走りづらい着物をハ

ア～ハア～着ているんですよ！」

「そんなことであきらめちやダメだぞつ！」

「もうちょっと気にしてください！」

完全に突如現れた2人に話を持つていかれた。なんか彼女の怒った顔が案外かわいい。

「えつと、仕切りなおして…あなたたちはいつたい何者？」

がんばつて2人の話の間に「」が割り込む。頑張るねえ。

「その問い合わせにはおハア～、答えできませんハア～ハア～私は

ちは秘密主義がハア～ありますのでゲホツ」

「そんなのあつたんだなあ？」

「私にはあつたのでゲホツ、ゲホ」

「あの～一回息を整えたらどうですか？」

ちょっと気を利かせて提案してみた。

「そんなのは必要ないぞ！ こうむせ続けているのもなんだか…うん、いいなあ」

今、この男、何に浸つているんだ？

「ハア～ハア～、わ、私も…大丈夫ですから

「でさあ～何を話そうとしてたんだ？」

「フウ。それはですね、元々近くに隠れて聞いているつもりだったのですが、この人のせいでなにもかも作戦がズタズタです！ そうしていれば必要な情報だけ聞くとく事が出来たのですよ！」

せこいなこの少女。印象的にもうちょっとといい子だと思ったのに。しかし、男の方は逃げも隠れもしないで現れた。立派なのはいいが…。もうちょっと考えて行動してもいいんじゃないかな？

「じゃあ今からでも隠れようじゃないか？ そちらは気にしないで話して結構ですんでっ！」

「そういうわけにはいきません！ あなたたちは聞いてはいけない言葉を聞いてしまつているのではないでしょうか？」

「ああ、こいつのおかげで場所を特定してもらつて、すぐに駆けつけたからなあ！ それで俺はお前たちに解決したいことがあるんだなあ！」

特定したって、こいつらにいつ何者なんだ？ なんかすごい能力でもあるのか？

「解決したい」ととは…」

「さつきおまえたちが話したことについてだあ…」

「『時間のループ』についてか…」

「私たちはただ1日戻つただけだと思ったのですが、まさか『ループ』をさせているとは思つてもみませんでした」

「たつたの1回だけなら見過ごしたんだけどなあ。どうしても俺たちは明日が来ねえと困るんだよなあ！」

さてどうしたものか？ この人たちは僕と同じ境遇に会つているんだろう。今日1日だけでも相当大変な日々を過ごしたんじゃないだろうか。しかし、仲間と言うわけでもなさそうだ。彼らはなんか別の何かが後ろについている気がする。

「どうしてだらう…私たちは一般人に気付かせないよう仕掛けたはずなんだが」

「の方たちは一般人に引っ掛からなかつたのでしょうか。男性の方はそれほどでもないのですが、女性の方が異常な気がしますね」

「私もそうだ。でも、何なのかが分からない…」

「この2人で変な会話をし始めた。僕を置いていくつもりか？」

「あのさあ～僕にもわかるように説明して欲しいんだけど…」

「了解しました。～～様」

さて、聞いてもわかるだろうか？

「ちやつちやか説明すると、あいつらは地球防衛軍に所属してて、未知との存在と毎日戦つてているんだよ！ だから私たちも標的にされちゃつたんだよ！」

「ま、マジで？」

「じゃあ結構ヤバいんじゃあねえのか？ 全然焦つた態度を見せないけど…。」

「いいえ違います。の方たちは地球を占領するのを目的とした宇宙人なのです。彼らは地球のことを学び、人間よりも早く神の存在に気付き、私たちに接触したのでしょうか！」

「や、やっぱすごいんだな！ 宇宙人！」

「何勝手に妄想に浸つてるんですか！」

少女がキレた。

「宇宙人かあ～！ 考えてなかつたぜえ！ ハイリアンみたいに唾液で少しづつ服を溶かし、体を痛めつけたり～！」

変なことを考え始めやがった。いつたいこいつの頭、大丈夫か？

「それになあ～透明になつて逃げ惑う奴をナイフで少しづつ、少しずつ切つていくのもいいよなあ～！」

「……」

「無視していいです……」

少女の方ももう諦めているらしい。かわいいそうな長身金髪男。

「それに、私はあなたたちが考えた変な妄想の方々とは全く関係はありません！ どつかの口から変な液ばつかだしてるとか、透明になるエイリアンでもありません！ そしてどつかの正義のヒーローでもありません！」

「それしか思いつかないんだけどもあ～何も特徴もない、胸がペッ

タンコなやつにはね！」

「～が挑戦的な笑みで言い放つ。そんなこと言つていいのか？ ～」

「だつてないだろ。

「べ、別に胸がなくてもいいんです！」

「あんなやつと一緒にいても、不釣り合いだよ」

「私にも、ちゃんとした自慢できることがあるんですから～」

「それってなんだ？ 言つてみろよ？ もしかして言えないのか？」

「そんなことはありません！ これです！」

彼女の頭にのつているニット帽を取つた。なんでそれを取るの？ 何かあるかとというとなんにも見えない。

「何もないじやん！」

「よく見てください～！ これです！」

彼女が髪の毛を搔きわける。

うん？ 何かあるのが見える。しかしなんだ、あれ？

頭の上には、少しどんがつたツノが覗ける。

「ツノ…でしょうか？」

「そうです！　ツノです！」

きつぱり言つてきた。

「えつと……オニ？」

「オニじゃないです！　ヒンマー　次期閻魔の紗羅です！」

ああ、閻魔様ね。閻魔様：

「ハツ！　何を言つてしまつてゐるのでしょうか私は…」

「だいぶ熱くなつてたからねえ」

「うまく吐かすことができたぜえ…！」

「作戦勝ちです」

「まんまとのつかるなんてなあ～お前つてやつぱ～」

順に、僕、伊豆那、エイルさん、長身男。

みんなから言われて真つ赤になつてゐる彼女は男の声を遮つて

「そ、そんな、こと！…ないです…」

声が沈んでいく。なんかかわいそうになつていく。

「で、なんで、次期閻魔がここにいるんだうづね？」

「それは僕も

「もういいです。なにもかも話しますから」

第2話 第7章

「まあ理由はそちらとあまり変わらないんですよ。現閻魔様がなかなかの問題を抱えているんです。仕事もうまくいかなくて地獄が全く回らなくなってしまったんですね」

「そういえば天使界にもそんな情報が回ってきてましたねえ」

「どんなことが起きたの？」

「地獄に来られた方がかわいそうだということで、

『皆やん！ 天国に上がつてよろしいです！』

などと言つてしまつて…。そんなことを言つたおかげで各方面に謝罪。それになりより、地獄にいた者たちに誤解が生じたために、暴動が起きてしまつたのです。それを抑えることはこちらでも大変でした。なにせ、死ぬことのないゾンビのような者たちが必死にこちら側に殴りこんで來たのです。なんとかして抑えましたが、今の閻魔は責任を取つて解任。そのため、閻魔の補佐をしていた私が次期閻魔として選ばれました。ですが私は補佐以外やつたことがなかつたため、この世界に送られ研修をさせられているのです

「んなわけで、俺、九条有斗が先生となつていいんだなあ！ でもよう別に教えることがねえから、何にもしてないんだけどなつ！」
そこは自慢する所じやないとと思う。

「しかしそこまでひどいとは…」

「ひどいのか？ なんで？ 別にかわいそuddiと思つたからやつたんだろ？」

「はあ～わかつてない、わかつてない」

伊豆那が睨んで来た。何か間違いでも言つたかよ！

「そんな奴がどの長になつても、そこはいつか終わっちゃうんだよ。たいてい、自滅だけだね」

「わかりやすく説明します。重要な役職に着いたものはどんなことでも情に流されてはいけないです。そんなことは多分人間界でも

同じなのではないでしょうか。まだ、人間界では情がある方が良いこともあるかもしれない。しかし私たちのような存在は、絶対、情に流されるとなにもかもが狂ってしまうんです

大変なんだな、彼らも。

「そんでさあ！だいぶ話がズレたから戻すんだけどよお！」

今まで彼女の顔を見てにやにやしてたのに、急に目をすぼめて……を睨んだ。

「今すぐこのループした世界を戻せ」

それだけ言った。

その言葉には今までの陽気なオーラが出ていた彼から出てくるのかといつぐらじの変わりようだった。これにはとてもじゃないが直視できない。直視してはいけないとそう僕の心が訴えている。何かこれについて、とてつもない理由があるんじゃないかと思う。僕は別にそのことに対して、そこまで気にしてなかつたが、彼にはとても重要なことらしい。

「なんでそこまでして戻したいの？」

伊豆那が少し強気な態度を示す。まだ理由は聞いてないが、たぶんこうしていることは僕に関係しているんじゃないだろうか。さつき僕のためにこちらの世界に来たと言つていた。

「私たちは、隆明の人生を変えるためにやつてることだ！ 隆明がいつもやる気のない一日を過ごしているから、一日の大切さを知つて欲しいからやっているんだ！ それをわざわざ神に申請してまでやつてのことなんだから、もう少し我慢して欲しいね！」

神に申請？ こいつ、まだ神としての能力がないのか？

「それは無理だ。絶対にな！ 僕たちにだつてなくちゃいけない物があるんだよ！ なんだかわかるか？」

彼は一言、一言に重さを加えながら話していた。

「それはだな？」『昨日』『今日』『明日』というものが必要なん

だよ、次期神様

だいぶ顔を近づけて言い放つた。

「お前らだけでこの世界のことを考えてんじゃねえよ。この3つがこの世界にとつて重要な物になつてているんじゃねえのか？」

「必要な要素ではあります」

どんな奴が来ても無表情で対応するエイルさん。

「必要なんだろ。じゃあ、わかっているだろうが！」

こんなに迫つてくると、もう隆明は涙目になつてしまつている。

「い」この世界を作つている神様は、ひ、一人ずつに救いの手を差し伸べるんです…

「ああ、そうかそうか。まさか…たつた一人のためにやつたことでも、犠牲になつてている人もいることを知らないとは言わねえよな？」

疑問を投げかけてくる。

「あるさあ！ それはだね！ こいつがつまらない人生を送つているのを変えてやらなきゃいけないから！」

「たつた一人変わるだけでそんなに変わるとは思わねえな！ あいつに対してそんなにする必要がどこにある！ 僕たちは俺たちの明日があるんだ！ それを捨てられるほど甘い奴なんていないんだよ！」

「ごもつともだ。とてもじゃないが、彼の言つてこむ」とはどう見ても筋が通つていてる。

「『昨日』『今日』『明日』の重要性はわかっているだろ？」

「あ、ああ！ わ、わかっているとも…」

だんだん押されぎみになつていてる。大丈夫か？

「じゃあなぜ『明日』が来ねえんだよ！ みんな一度は明日が来なくなるもいいと思つたことがあるはずだ。テストとか発表会なんかだろうな。しかしな。みんなは自分では知らないうちに、『明日』に對して期待を抱いてんだよ！ そうじやなきや明日を生きる価値もなくなつてしまつんだよ！」

「うつ…」

どう見ても～の負けだ。せつかく僕のために頑張ってくれたのに、僕は全く彼女の助けになれてない。

「あの～もういいから…僕のこと構わなくていいから」

「『お前は黙つてろ!』」「

なんで2人でハモるんだよ！ せつかくこんなことを早く終わらせてあげようと思ったのに…。そこまで拒否んなくていいだろ…

「もう～～いいや！ 別に誰かに言われたからってやめないからああっ！」

～の顔が完全にグチャグチャになつてている。違う意味で迫力がある。

「もうこれはなあ～実力行使だなあ！ そうしないと喧嘩」と聞かなそりだしき無理そうだからなあ～どうだ？ バトンか？」

どうすんだよ…。相手はやる気満々の顔で、手でどうからでもかかつてこいやのような仕草をしていく。

「やつてやろうじやんつ！」

おいおい…。なんでやめないんだよ…。なんかどちらも勝つ気満々なんですか…。

「そうじゃなきゃなあ！ もー、やろうじやねえかよ！」

「待つたつ！」

完全に殴りかかるとしていた男が、ギリギリのところでの顔の前で止める。

「なんだ？ 怖くなつたか？」

「そんなことないつ！ 私は戦つちやいけないのつー」

…ハア？

「……どうこう意味だ？ わつき戦つと言つただらつが。矛盾してんじやんかよ！」

「ちゃんと理由はあります」

エイルさんが2人の間に割り込む。

「伊豆那は今、研修生としてこちらの世界に来ていることを聞いてますよね？ 私たちのようなこちらの世界でないものが直接戦つて

はいけないことになつていいのです。そうですね？ 紗羅さん

「はい。私たちもそう決まっています。わかつてくれますか？」

次期闇魔様が男に向けてそう言つた。彼は納得がいかないのか、舌

打ちをして

「じゃあなんで戦うつて言つたんだ？」

僕もそこが気になる。どうすんだ？

「もし戦いたいのでしたら伊豆那のパートナーである隆明様とお戦

いください」

そんな手があるんだなんて気付かなかつたぜえ……

「なんで？」

ぽつかりと口を開けてしまつた。

「なんで僕が戦わなくちゃいけないの？」

「パートナーだからです」

「…すみませんが辞退します。負けたことにしていいですか？」

こんなのにいつまでも付き添つていなくていいだろう。

「それは無理です。パートナーが決めてしまつたので連帯責任です」

「だそうだぜ？」

アハハハ…早く殴られて終わりにしてもらおうつと。

「そういえば、パートナーである私は協力してもよろしいでしょうか？」

闇魔様がそんなことを言つた。

「手助けぐらいならば大丈夫です。直接相手に何かすることは禁止です。あくまでパートナーに対してだけです」

「それならばやらせていただきます。いいですか、そのままでいてください

ください」

何をする気だ？

彼女がゆっくりと顔を下に向けて喋り始めた。

「地獄に申請。拷問道具をまず「解体バサミ」を呼びます。……許可がでました。それではどうぞ。下にご注意ください」

男の前あたりにいくつもの円が重なり下にめり込んでいく。黒や赤

が混じつて穴を作つてこる。まるで地獄の門が開くよつた穴。ビリ
までも続く穴だ。

「な、なんなんだ？ 何かがこちらに来てる」

下から何か白い点がこちらに向かつてやってくる。それも高速で。
そして僕たちの前に現れたものが急停止し、男の前で浮遊している。
「地獄の中でも鬼たちが愛用している金棒よりも戦闘向きなのでこ
れを選びました」

さすが閻魔様。田代ではなく銀の誰でも使つたことのある普通のはさ
みが浮遊している。しかし大きさが十倍ぐらいなところを抜いてく
れればな。あんなのが地獄で使われているのか？ 嘘のようないい気が
して仕方ない。

「これで戦えと？ まあよいよいいよなあ！ じゃあやつは
どうすんだよ？」

「やうだよ。どうすんだよ？ 何か武器はあるんだろう？ 出してく
れよ」

「そんなのないよ！ 自分の力でがんばりなつ！」

「ちょ、お前、それはねえだろが？」

待て待て待て待て……無理だうが！ 相手は武器を持つてい
る。僕武器なし。勝負みてんじやん！ どうすんだよ！ うまく
逃げられなくて死ぬかもしれないだぞ！

「特になさそうだし~やろうじやねえか！」

急にハサミをつかんでこちらに向かつてきた。

「お~お~お~お~！ まだれも開始の合図だしてないんですけど
どう！」

うまく後ろに飛んで避ける。よく見たらまだハサミを開かず、そつ
きのはただ地面に叩いただけだった。

しかし地面がくぼんでしまつていて。どれほど力使つてんだよ、
こいつ

「ほりあー！ 逃げてないでよお~正面からやられっこ~つんだよ
お~！」

「そんなの無理だつて！ 僕はそこまでの勇者じゃないっ！」

今度は横に振つてきた。さすがに避けれない。横腹に食い込む。刃が出てないおかげでバツドで殴られたような感じになつて、横に吹つ飛ばされる。

「おもしろみがねえや。なあ～？ こいつの首切つていいかあ？」

地面を転がつて、やつと止まる。
だんだんとこちらに向かつて歩いてくる。大きいためハサミを開けるのに苦労していたが、開けた瞬間の音で僕はちびりそうになつた。いつも使つていた時の音が低くなるだけでこんなに恐ろしいのかと思うほどだ。

「なにしてんのっ！ 開始してまだ全然立つてないじゃんっ！」

「僕だつて殺されたくないんだよ！ だからなんか出してよつ！」

今思つたが、なんか眼鏡をかけた小学生五年生のダメ太君が青い狸に頼んでるのと同じことをすることに気付いた。もしかして僕は、あんな奴だつたのか…絶対思いたくない！ そんなわけがない！

「まだ首を切るのも盛つたねえからなあ～ここだけもらうぜえ！」

僕の右腕を挟むように刃を地面に刺す。そして地面を掘りながら刃が締まつていく。

グシャ

「ぐわああああああつああつああああああああああああああ！」

瞬間に抜こうとしたが、ちょうど手首のところで挟まれた。そして彼は唸りながら思いつきり力ずくでハサミを閉じた。樂々男は僕の手首を持つていいくことが出来てしまった。たぶんこれが骨のある部分になつていればまだ良かつたのかもしれない。

「さてどうすんだあ～？ パートナーがこんな状態でもいいのかよお～！」

苦痛でもがき回る僕を見下して男は、さらに僕のもつ片方の手、左手首も切り落とそうとして刺していく。

さすがにこれはヤバい！

そう思つて僕はその場から立つて走り出す。危機一髪で大きいハサミの串刺しから逃れる。男はハサミを地面に思いつきり刺したために、抜くのに困つてゐる。そのうちに逃げなきや！ マジでヤバい！ このままいけば出血多量で死ぬ！

「おい！ どうにかして僕を助ける！」 出血だけでも止めてくれ！

「大丈夫だから。そのうち止まるよ」

「全部体から抜けでな！」

こんな場合じゃないのになんで僕は突つ込んでいるんだ！ 正氣か？ 正氣なんだろうか？ 正氣だよな！ 正氣だ！ 絶対にだあつ！ ヤバ…頭がもうろつしてきた…なんか言い残す言葉を考えとかなかつたなあ…。というか、今までう三回も死にそうになつているのに一度も考えてなかつた。なんてバカなんだ僕は…。最後の最後にバカを自覚して、またあちらの世界に送られるのかなあ？ 一日に何回も行つていいところではないよな、あそこは。

「あのさあ～その間抜けな顔されるとわあ～俺のやる気が落ちるんだけど…」

「最後にかけられる言葉が間抜けなんて言わせねえっ！ 絶対になつ！」

「最後と言つのはびうこうじとですか？ ～～様

「気付いてなさやうだから、言つけど…」

なんかため息つかれた…。みんなで憐れんでいるんだ？ 別に死ぬ時は笑顔で送り出された方がいいなあ～といこの時も思った。もうダメだ。「めんよお～

「右手触つてみたら？」

「どうことじだよ？ 右手だろつ、右手つ！ 肩 腕 関節 その

先はない。なにがいたかったんだ？

「い、いや、そこじやないからつ！」

「じゃあどいだよー」

「なぜ右手首を触ろうとしないのですか？」

「ないものを触ろうとしてもむりだろー！」

「お前つてさあーもしかして本当のバカか？」

「そのようにしか考えられないです。すみませんが…」

「なんですか！　みんなでバカ扱いすんだよー」

「「だつて右手がちゃんと生えたのに死にそつなぐらい叫んでるから」「

伊豆那と男が口をそろえてそう言つた。

……？　ないけど？　どんなに触つてもないんだけど。

「あれれ？　みんな嘘をついてるんだね？」

「「お前の頭はイカれてんのかつー！」」

「せつときからどいに触つてんのって言いたいんだよつー！」

「なんかその言葉を聞くと『変態ー』って言われてるみたいだなあ

」

「ダメそうですね」

「ダメだなあ～こりやあ」

「隆明様：正気に戻つてください」

なんでみんなでそんな顔すんだよー！

「もうつづきたい！」

ズガズガ僕の方に向かつて歩いてくる。次期神様候補生さん、そのような鬼の顔されても僕は困るんですが。もつと聖母のような微笑みでもいいんじゃないかな？

伊豆那が僕の右手を掴んで伊豆那の心臓部分に連ぶ。

「ほら！　これ以上ないとは言わせないよー！」

「すみませんが、本当に胸がないですね…」

「ブチッ……なに考へてんじゃああああ！」

グハアッ

思いつきつ殴つてきた。さつきのハサミで殴られた時よりも痛てえ。

「な、なにするんだ！ 本当のこと言つただけだろ！」

うん？ そういえば、なくてもそれなりに手応えがあつたなあ～たぶん大きい方はやわらかいのだろうが、僕はまだそんな機会がないからよくわからない。

でも小さくとも、なくともそれなりに反発感が手の平で味わうこと

が出来た。手がないのに……手？

「なんであるの？」

「それはですね。私たちの扱う拷問道具はどれも殺すために作られたものです。しかし、よく考えてください。地獄に入つた者は一生そこで死なずに暮らすのですよ。だから殺すためなのですが、生き返らせることも出来るのです」

「今回は隆明様の血が足りなくなつて死んでしまつたと解釈できたのでしよう」

「一応死んだつてことか？」

「たぶんそうなるなあ！」

今日何回死んでの、僕よ……。

「じゃあ～続きとこきますかあ！ 紗羅！ もうめんどいから強いの出しちゃつおうぜえ！」

「わかりました。拷問道具ではありませんが、使い勝手のいい地獄にいるのを出しましょ～ 地獄に申請。地獄の番犬の鎖を解き放ちます！ ……許可が下りました！ 幻獣『アメニシート』ー」

今度は男の後ろから、とてつもなく大きな魔法陣のような円が現れる。

「お、おーー こんなのと戦わないといけないのかよー？」

そこに現れたのは、頭はワニ、たてがみと尾と上半身が獅子、下半身は力バのような、絶対地獄にいるものじゃねえだろう的なのが出てきた。たぶんエジプトがギリシャ神話から持ってきてんじゃねえのか？

そして大きさが、男の三、四倍はある。なんてデカさだ。

「死者の魂を食べるかわいい幻獣なのですが、食べたその魂は再生されなくなってしまうので本当は鎖をつけています。しかし、今回はあなたは死んでいるわけではないので許可が下りました」
女の子がめちゃくちゃ変な幻獣にスリスリと顔をすりつけている。

「い、いや、僕はもう一回も死んでいるんだけど？」

「大丈夫だと思います。矛盾してますけど大丈夫です。保証もしますから」

「今していることが保証になるとお思いですか？」

「はい！」

ヨダレを出してこちらを見ている幻獣様がかわいいらしいが、僕にとっちゃ無理だね。どう見ても僕しか見てない。一回も視線を外してない。

「じゃあ～やる～じやねえかあ！」

「ほら、行つてください 花ちゃん！」

『花ちゃん』って言つんかい！ ミスマッチな名前をつけたもんだなあ！

「ガルウウウウウ！」

マジでヤバくないか？

「大丈夫ですよ、隆明様。『アメミシト』は立つことは出来ても、歩くことはできませんから」

いやあ～どう見ても襲つてきそつだけど…。
「てか、どこ行つた？」

目を放した瞬間に消えた。跡形もなく。どうしたことだ？

「上だ！ 隆明！」

「上だと!? 上を見上げたけど… どこ？」

……ああ、なんか点になつて見えた。目を凝らして良く見た。体の一部がライオンぽいから猫パンチ的な感じで僕に向かってくる。

……逃げた方がいいよな？ 逃げよう。逃げるんだ！

「スーパー～～ボインボイン～～パンチ～～だよ！ 花ちゃん！」

熱く地上から見守る女の子がもつ、ですます調を使わないではしゃいでいる。

「その名前はやめりつ～～！ なんか誤解生むから～～！」

走る。走る。アレ？ 走れない。豪快な音が後ろから響いた後、味わつたことのない地震が起きた。それのせいだ、宙に浮かれる。

「うおおおつ？」

なんとかして受け身をとりながら地面に転がる。

「ガルウウウウウツ！」

あんな高くジャンプしたのに、全く甚むことなくこちらに向かって飛んできた。

やつとわかつたが、足をバネのように使って、さつときは真上に飛んでいたようだ。しかし今回ほんのちからに飛んできている。避けれない。「こんどこそあてるのよ…」

と言つてるときにはもう叩かれていた。

だいぶ飛ばされ、土煙を上げながらよつと止まる。せ、背中があしす、すれて痛い…。

「うつ…」

目を開けた時にはもう田の前に、ワニの頭が見えた。

「あ、やばいかもしだせん…」

遠くからそんな声を聞いたような気がした。や、ヤバいつて？

「グルウウウ…アアアア」

大きく口を開けて僕を食べよつとしている。マジかよ。本当に死者の魂を食いに来たんじゃねえか？

とにかく後づぐる。もがいて、もがいて、もがきまくる。しかし、大きな口ではそのまま覆い被されてしまつ。そして地面を掘りながら僕を飲み込もうとした。

ああ無理だ。僕はここまで的人生らしい。さつき言つてたが、たぶん神様の力でも食われた魂を再現し直すのは無理があるのではないと思う。相手が幻獣だしね。もう足がビクビク震えてしまつて動けない。今度こそ終わりだな…。

「

「

なぜか何も言われてないはずなのに何が聞こえた。聞いたことのある声、僕の心の奥を見透かされているような言い草をしていながら、僕の心を覆ってくれる暖かい声でもあった。

しかし、僕は周りから切り離されたからのよう目に目からも、耳からも、鼻からも何も情報が運ばれなくなり、暗闇が広がった。

「おにいちゃんちやん……！」

得体の知らない物が背中から抱きしめられた……にしどきたい。

「早く起きてよう～！ このふかふか～ちゃんが横にいても起きないなんて損だよ～！」

ウザい。ハッキリ言つてじやまだ。

彼女は僕の妹、穂積真桜。

まだまだ小学生の面影の残る童顔をして背も低いのだが、中学生一年生である。髪は少しウエーブのかかったツインテール。一重まぶた。頬や唇は張りのある弾力にほのかな紅さが顔全体を引き立てる。

だがしかし、どう見ても幼さが出来くつのにこつは、出るとひねり出でている。

まあ～～もう中学生だから出でてもおかしくはないはずだが、マジで背中から抱きつかれてその部分が押されると、

「ねえ～～！ 別に数か所に軽い打撲で済んでるはずなのに！」

耳元からささやくように言つてくる。もうこれはマズイ…。耳の中に息が入ってきてくすぐったい。

一応、背中側にこるので口を開けてもバレない。だから状況確認をしてみた。

まず見えたのは口は沈みかけ、橙色と黒の境目が見受けられる窓だった。目が動かせる範囲で他の様子も見てみたが、壁は汚れのない真っ白。近くには、台の上に花瓶があるのが見えるが花はない。寝ているから、下にあるの白い布はベッドだと思つ。

ここはたぶん病院だ。たぶんね。

たぶん今回もちゃんと生き返ることが出来たよ～だ。バンザ～イ
バンザ～イ…やめよ～。それでどうよ～か？

「早く起きてよ～～～」

がつちりと僕にしがみ付く手がさらに胸のところで縛つて、出ているところが当たり、むずかなくなつてくれる。

さすがにマズイ氣がしたため、起きたような仕草をする。

「ああ！ やつと起きたあ！ ねえお兄ちゃん！ 私のことわかる？」

「うううううう」

「ど、どうしちゃつたの？ 打撲だけだつて先生が言つてたのにやつぱ、頭のどつかヤバくなつちゃつたのね！ ど、どうしよう！ テレビみたいにチヨツプすれば戻つてくるかなあ？ もう一か八かだよね？ とりやあああ！」

「人はそんな単純なものじやねええつ！」

まとわりついていた手が離れたため、やつと動くことが出来る。振り返ると彼女は大胆に立ち膝で、こちらの頭に向けて手刀を振りかざしてくる。とても力が入つてるように見える。これつてテレビを直す時の何倍もの力じゃないのか？

「お兄ちゃん！ 覚悟おおおつ！」

「お前は何を狙つてんだあああつ！」

顔面を守るために手で白刃取りで受ける。

「唸るし、どこか異常なところがあるわけでもないし、残るなら頭が一番効果的じやないかなあと思つたのに！ なんですが普通に戻つちゃうの～～？」

「特に異常なところはないから！ セリキのは[冗談]！ [冗談なんですよ！]

全然信じてない顔をしている。なんとかして手刀を押し込もうとする。

「じゃあ打撲だけなのになんで寝かされてんのかなあ！ どつかしら悪くてご家族に報告が出来ないと判断されたのかなあ？」

「僕に言われても知らないから！」

「じゃあ今から聞こ～～！ 今すぐ！」

「もうちょっと待つてろつて！ 別に周りに機械とかないでしょ？」

たぶんそんな悪くないと思つかい」「

「そ、う……。でもなるべく早く見てもらいためにナースさん呼んでくるね!」

部屋を出て行ってしまった。

ナースさんを無理やり連れてくることだけはしないで欲しい。なんだかまだ、眠足りない気がしたから目を閉じた。

「少し騒がしいので静かに安静にされていただけませんか?」

「……おこどりこり」とだよ…。

目を開じて数秒。

「待つてください。なんでここにいるの? ハイルさん?」

「すぐそこにいたから来てもらつたの」

目を開けたらそこには、天使だと黙っていたエイルさんがいた。ナース服で…。

「知り合いだつたの? オ兄ちゃん」

「ま、まあ~ね。いろいろとあつたから

たつた今さつき会つたなど言えない。

「もう少し安静しておいてください。すみませんが、妹さんは退出してもらつてよろしいでしょうか? 少し確認作業があるので」

「事故についてですか? ならお兄ちゃん」

な、なんだ?

「くれぐれも…世間から見放されるようなことはしないようにね? 最近の女子は顔が笑つていても、目は怒つているというのが流行りなのか…。

「大丈夫です。私はどんなことをされても返り討ちになりますから」「頼もしい~! だつてわあ、お兄さん。がんばってねえ~」

「元々やるつもりはねえっ!」

「バイバイ~」

「もう出てけえ!」

部屋を出ても笑顔で頭を出し続けた。こんな笑顔見たことないほどだ。悪い意味で…。

「さて、どこまで覚えているか確認します」

ベッドの上に正座で座る。

「さんは近くの椅子に座る。

一応だが、さつきの戦いは覚えている。ヘンテコなカツプルに襲われて、最終的に花ちゃんが僕を食つた?と思つ。

「花ちゃんに食われたことまで覚えてんだけど…」

「何のことでしょう?」

「…」

真顔で言われても、こちらの反応の仕方がわからねえ!

「ジヨークです」

「…」

すんなり言いやがつた! 必死に何か言ひてやる!としていたのに!

「そんなことはどうでもいいんです」

「だったら早く済ましてください!」

この人まで僕をもて遊ぶのか? いつたい世の中はどうまで僕に理不尽なんだ!

「なんとかして、あの幻獣に食われる寸前、助けることができました」

「なんとかして?」

「その辺は詮索しないでください。それでですね、飲み込みが早くなりましたね。感心しました。先ほどまでは『夢を見ていたんだ!』って吠えていたはずですが、この数時間でここまで変わるのはある意味すごいですね」

「そういうもんでしょうか…。もう慣れたんですね。慣れさせられたんですね。慣れさせたのはエイルさんたちじゃないんですか?」

「そうだろ絶対にさ…。朝から交通事故に会わせる準備をしていたんだし。今日一日で僕の人生が日暮ぐるしく変わってしまった。」

「そうですね。私たちのせいであっ様に不快感を感じさせてしまつ

たのは確かにようですね」

「今もだよ！」

「しかし、しょうがないんですね」

「なにがですか？」

「よくわからない。」

「どんなことがあつても絶対なんです。 隆明様のパートナーとして伊豆那が人生を変えていかなくてはいけないんです」

「それはさつきも聞きましたが。 それになんで、僕の人生を変えなくてはならないのですか？ 何かしらの別の理由があるのではないんですか？」

戦闘する前に伊豆那が僕のところへ修行することを話した。 そして、その行いが僕の為だと言っていたが、あの男が言ってたように一人よりも全体のことを重視した方がいいのではないかとそう思う。 そしてなにより人生を変えなくてはならない理由が全く出てこない。 そこまでしなくてはいけないのか？ 抽選で選んだとか言っていたが、僕のことでの失敗しているなら別の人でも本当に良かつたのではないか？

「神はこの世界のあらゆるものに対しても平等です。 しかし例外と言ふものがあるんです。 その例外は、今この世界に何十人という少ない者たちなんですが……」

「それに入っているのが！ 隆明なんだよ！」

突如、扉を豪快に開けて、堂堂と歩いてくる。 ナース服で、全然に会っていない。 おままで？

「隆明。 あの駐車場で言ったことはちゃんと覚えているよね？」

「一応は」

微妙だが覚えはある。 エイルさんが本物の天使だということ。

「……変なこと考えたよね、今！」

「いいえ！」

即応。 なかなかの反射だったと思つ。 だつてやましいことなんて何にも考えていなかつたから。

「まあいいや。それでエイルさんが話したことだけど、『幸運児』と『不幸児』ぐらいは覚えているよね？ そしてあのときは誤魔化したけど、本当はその『不幸児』のなかでも最下位なんだ、隆明。だから選ばれたんだ」

もう、何言われてもすんなり納得できる自分がいる。さつきまでの頭がオーバーヒートにもならず、ああそりなんだ…の要領になってしまっている。これは本当にマズイ。

「話は変わるけど、神様についてちょっと話すね」

「それは私が話します。どうせ～～が話してもわからなくなってしまうのです」

そこは賢明な判断です！ エイルさん。

「神様の力は無限ではないんです。有限なんです…。どういう意味かわかりますか？」

「全然見えてこないですけど。そんだけで何かわかるんですか？」
「無限じゃなくて有限なだけなんだ。それほど変わることじやないんだろうか？」

「駐車場で話したことですが、どうして神が入れ替わる理由はちゃんとわかっていますか？」

「……神様の力がなくなるからと言つてましたよね？」

「ちゃんと理解されているようですね。安心しました」

そんなに僕は低レベルなのか？

「それでです。神の力がなくなる理由は～～様にも関係しているのです」

「別に僕とあまり関係が無さそうなんですが」

「それがチョーあるんだよ！ 自覚がないだけ」

ベッドに突っ込んでくる。

「まず神は、神になつた瞬間からこの世界の維持のために、神のなんかにある能力を全て出し切るんです。その期間は神それぞれで、百年たつたとしても持つ者もいれば、一年も持たない神様もいるんです」

「そんなに神様はか弱いんですか？」

「たいていほとんどの神は同じぐらいの力を持つことは出来ます。しかし、神にも不幸な方がおられるのです」

……神様がそんな状態じゃ、本末転倒じゃないか？

「ある年に、特別な物が生まれてきます。それは神の能力を吸い続ける物たちなんです」

「そいつらのせいで神は人間でいう1秒に、この世界に放出する力の量が変わるんだけど…今年はとてもじゃないが相当な量が流れ出ているんだ！」

結構深刻な顔をし始めた。長身男との会話で泣きそうになっていた泣き顔とはまた違う顔だ。どうしても自分たちでは何も出来なくて悲しくなっている顔だ。

「そいつらとは言つてはいけません！」

「でも…っ！」

「彼らはこの世界にとつてまた必要なのです。～～様も」「僕もですか！」

「そうです。～～様はこの世界にとても重要な物なんです！　なくしてはならないんです！　必要なんです！」

僕は何もした覚えがない。

僕はこの世界の「」だと考えてもおかしくないほどの自堕落な生活を送つて來た。

小さい時から両親と比べられて、小学生ではイジメに会い、中学生では落ちこぼれになり、今、高校生になつて僕は、周りから人を避けて生きるようにしていた。

そんな毎日を築きかけていたはずが、今日一日で変えられてしまつた。

こんなにも崩れやすいものだったのか。

こんなにも粉々になつてしまふものだったか。

こんなにもつまらない人生を過ごしていたのか。

こんなにも恐怖しそうで動けなくなつてしまふことがあったのか。

そんなことに気づかされることを僕は嫌だった。
嫌だからそんなのに会わないようにしていた。

というよりも最初から回避した。

逃げていた。

横じゃなく。

後ろへ。

どんどん逃げる。

周りはどんどん遠ざかっていく。

周りは走り去っていく。

僕はもう進めなかつた。

前に。

前に進むことが出来なくなつていた。

それはいつからかと言われても僕はわからない。

わかるわけがない。

わかることなどできない。

わかっているのかもしれないけど、わかりたくない。

第2話 第9章

そうやつて僕は生きてきた。

心の中で泣いている自分がいることに気が付きながら。心の中で泣いているときは幼馴染がいた。

心の中に。

いたけど僕はなるべく一人でいたかった。

「どうして泣いている時にいるの？」

そう聞いたことがあった。

心にいる幼馴染に。

「それは私が悠美香ちゃん。悠美香ちゃんが私だから理解できない。

「そうだろうね」

「そうだろうと

「いつか理解できる時が来るよ」

来てくれるの？

「来るじゃあ～おかしいね」

なにが？

「行かなくちゃいけないとこ」

僕は行きたくないよ

「いつか」

いつか？

「いつか進まなきやいけないんだよ」

待つてもいいんじゃないの？

「立ち止まっちゃいけないよ

なんで？

「そのうり」

…?

「そのうちわかる口が来るよ

わかるの？

「わかるんだよ」

そういうもんかな？

「うん」「

逃げちゃだめなの？

「だめ」

立ち止まつちやいけないの？

「だめ」

歩いた方がいいの？

「立ち止まるより歩いた方がいいよ」

走った方がいいの？

「そこまで焦らなくていいよ」

頑張らなきやいけないの？

「頑張った方がいいんだよ」

努力しなきやいけないの？

「努力した方がいいんだよ」

泣いてもいいの？

「いいんだよ」

笑つた方がいいの？

「それはわからないや」

わからないの？

「むずかしいんだよ」

むずかしいんだ

「うん」

僕はどうしなきやいけないの？

「ただ、前を向いて歩くだけでいいんだよ」

前に壁があつたら？

「乗り越えちゃえ！」

前に崖があつたら？

「飛んでつちやえ！」

前に

「もう一つのセーーー自分で考えたらーーー」

……。

心の中まで僕は邪魔者扱いされるとは……。

はい！ 变な回想終わり！

一応言つときますが、このことはちゃんとあつたことなんです！ 知らないうちに、僕はいつもあの世界につのまに引きずり込まれている。いまだに僕はあの世界に、どうやって行くか、どんな世界なのか全く知らない。

……で、

「なぜ……僕が必要なんですか？」

「それはまだ言つ時ではありますん

聞けることが少ない……。

「えつとじやあ～特殊な物たちのせいで神の能力がなくなるのはわかつたけど……別に能力がなくなつても大丈夫じやあ～」

「全然つ！ 全然大丈夫じやない！」

伊豆那がとにかく僕の肩を掴んで揺さぶつてくる。ああああああああ。

「説明がまだでしたね。すみませんが、伊豆那。やめてあげてください。」

「フンつ！」

「すみませんでした。それでですね。神の能力がなくなると寿命がなくなるのと同じなのです」

「もしかして……」

「神は死ぬのです……そして現神は伊豆那の父親的存在なのです」

妹を連れて僕は病院を出た。病院でちゃんと合つていたのだ。僕の推理？はちゃんと合つていてよかつた。

医者にもう一度診てもらひて最初に言われたのが

「……あ、ああ、ああああたまめかーだだだだだあこじゅうひん」

「...」

「先生? もうそろそろですかね? お茶の間の時間」

とってもナイスバディなナースが先生にそう言つた。

ପ୍ରମାଣିତ କାନ୍ଦିଲାରେ ପାଇଲାଗଲା ଏହାରେ

ੴ ਸਤਿਗੁਰ

۷

スーパーイヤ人にでもなつたのか？

「いつも」の感じなので気にならないでください」

はあ

そんなわけで外で待つてくれた妹を連れて帰路についている

「そ、いえはなんて僕か」「にい」とを知っていたんだ?」

おもてなしに力を貸すことにはやめておく方がいいと将来が危ういな？」

「」

な、なんで泣いているの？

「お兄さんがあたしのことが思つてくれたあーー。」

7

ダメな妹だ。いつから壊れてしまつたんだろうか。こんなことでさ

え泣いてしまつなんて、どんなに涙もろいんだよ。」

「…強くなれよ、妹よ…」

「お、お兄ちゃん～～ん！」

思ひ一歩前に進むべく走るなかで、この年になつてや眞鶴が

「早く帰ろ？」

「おひー！…？」

電子音が鳴る。ケータイの着信音だ。幼馴染からの。

『もしもし？ そっちに～～ちゃん迎えに行つた？』

「ああ。ちゃんと来てるよ」

『あのさあ～。たぶんそんなにひどくはなかつたから、大丈夫でしょ？ だからそのまま家に帰つて準備でもしておいて！ ママはおばさまと会つたから一緒に買い物してゐんだつて。それでもうそろそろ買い物が終わるつて』

「わかつた。というか愛里子は邪魔だったよな？」

愛里子と言つるのはお母さんの名前。幼馴染のお母さんと区別をするためにそう呼んでいる。

『まあいつも通りでおもしろかつたらしいよ』

いつも通りといふのは、愛里子がその店の商品を使って何かしらの芸をするといふなんとも店にとって、はた迷惑な行いをすること。いつもやめると言つているのだが、今回もやつてしまつたらしい。帰つたら叱つとかないといけない。

「そう言えばお前は？」

「なにが？」

「事故のあと、どうしてた？」

『隆ちやんが救急車で運ばれた後、警察に事故の事情聴取されて、今終わつたところ。なかなか終わらないから疲れちゃつた』

「大変だつたんだな。まあ帰つたらおいしい物をごちそうするよ」

『うん。じゃあ早く帰ろうー。』

「そうか。じゃああとでな」

『うん。あとでね』

電話を切る。

「お前、悠美香から聞いてたんだな？」

「まあね～～」

「まあいいか。とにかく早く戻つて何を作るか考へないとな？」

そういうえばなんであいつは僕が病院にいることを知つてゐるんだ？

「……」

「どうしてこうなつてしまつたんだ？」

「隆明！ そこの取つて！」

「意外な特技があつたもんですね」

「このカレーなるものは素朴な味で故郷を思い出しますね」「この肉柔らけえなあ！ どうなつてんだあ！」

「やっぱ自慢の息子よ～～」

「なんで私よりも早く上達してんのよ」

「お兄ちゃん！ ああ～ん」

「隆ちゃん！ ほらほら！ ああ～ん」

「一気に口に運ぶなあ～ぶぐつえ」

……今から説明する。したくないけど。

帰つた後、外にテーブルやイスを準備して待つていた。

アウトドア系の親父が残していつた使い勝手のいい物ばかりだ。

言つとくがまだ親父は死んでない……と思う。

そのあとすぐに、お母さんたちも帰つて来たため、すぐに調理をし始めた。

柔らかいローストビーフにするための仕込みを最初にやつておく。元々、カレーを作つといたので温め直す。

今回は精米ではなく玄米を使う。

ナポリタンやたらこ入りパスタをフライパン一つを使って素早く作る。

なるべく愛里子は手伝わせない。妹も。手伝わせたら大抵の物を黒こげにされてしまう。焼かなくてもいい物でも…。

しかし幼馴染と喜里子さんはとっても良く動いてくれる。なりよりも彼女たちはいつも一人で料理を作ることが多いから手慣れていて、

僕よりも効率がいいかもしね。

「痛つ！」

やはりこいついうやつが出てくるもんだ

「つまり食いしてんじゃねよ！」

盗人の「」とく皿に盛り付けた料理を愛里子が手で取ろうとする。

「お兄ちゃん？ あたしはいいよね？」

お母さんの後ろから妹がこそそと出でくる。

「なんで『あたしはいいよね』だ！」

「ええええええ

「うつさい！ といつかこいつでまた食うんじゃねえ！」

「『ええええええ』」

「一人でハモるな！」

邪魔だし、どつか遊んでいろいろつつのー

そしてなんとか協力して残りの2人がよだれを垂らしまくるほどのおいしい数多くの料理を作り終えた。

「さて、食べましょうか？」

「ほら。 そこの皆さんも食べよつーー！」

皆さん？ 愛里子、誰のこと指してるの？

「いやあ～バレってたかあ！」

「おいしそうだな！」

「頂いてもよろしいのですか？」

「これはすごいですね！」

「おいおい…。 なんでお前ら四人が仲良くなっちの屋根にいるんだよ！」

順に長身男、伊豆那、エイルさん、次期闇魔様。

見つかったから隠れる必要がなくなつたのか、こちらの庭に飛び降りてくる。

女子3人はこちらの世界の人じやないからわかるが、長身男よ… お前は3階から飛び降りたらどつかしらの骨が骨折してもおかしくな

いんだぞ。

「この人、さつき病院で見たよ！」

妹がなんでなんで？という顔でエイルさんに話しかけに行つた。エイルさんが対応に困つてゐる。ホント、迷惑のかかる妹でスミマセン。

「『』こんなに背が大きいなんて～～」

お母さんたち一人で長身男を見て驚嘆している。そしてこっちを見る。

「『』……『』

別に僕と比べなくていいだろう！

「…どうしようか？ 料理は足りるよね？」

「…量的にはそれなりに作つといたからたぶん大丈夫」

幼馴染は不審者四人組に戸惑つていたが、別にそこまで変でない？ ことがわかつてからは、料理の量が足りるか気になつていて。

そして、せっかくイスを用意したが、みんな立つてワイワイ騒ぎ始めた完全に宴会状態に突入してしまつた。

「こんなに大勢で盛り上がるのも久しぶりね～～

「ああ。たまにだが、こんなのも悪くはないんじゃないかな」

愛里子も普段は、なかなか家族で食べる時間がいつもないため、今回のようなことがとてもありがたいと言つてくれた。

「なあ？ サっきのことだが、殺すまでは思つてなかつたからよお！ そこはわかってくれるとありがたいぜつ～」

男がそう言つてきた。

別に根は悪くはないらしい。だが中身はわからない。腐つてゐるかも…。

「そちらの次期神様

「の候補だ！ まだ決まってないからな」

次期闇魔様がそう言つた後、横から伊豆那が割り込んでくる。別に細かいことはいいんじゃないか？

「わかりましたから。それでですね、私たちの戦闘は一時中止した

いのです

「話し合つたんですか？」

「まだ少しだけですが。なるべく時間をループさせないで欲しいのはやまやまなんですけどね…。だけど何日間かは別にいいですから」「そうですか…」

僕あまりループされることは贊同できないが、今すぐやめてくれとも思わない。

「後はですね、花ちゃんがあなたを食おうとしたことを謝ります」「そ、それは別に大丈夫だから。謝んなくてもいいから」

「でもさあー！　お前にそんな力があつたとはなあー！」

「…？　なんのことだ？」

周りを見るとなんか〜と閻魔様の顔が卑屈つていて。怪しい…。

「お前気付いてないのかあ？　花ちゃんに食われグフオツ！」

「あら〜すみません。服についたシミを取りつとして、ついつ…」

「私も、私も！」

「グフオツ！」

「…なんか怪しくないか？」

シミは拭くだけでだいぶ取れるが、殴るほどの力が必要なのか？

「つんなわけで、盛りあがつて行こ〜うぜえ！」

生き返るの早つ！

なぜか急に歌を歌いまくる長身男。どこからカラオケボックス持ってきた！

せっかくのきれいな着物を着ていた次期閻魔様は、先ほどの中身をこぼし汚れたので、着物を脱いだ。そのため、だばだばな服を着ている。しかし大いに楽しんでいるようだ。妹は腕から離れない。なぜか幼馴染を睨んでいる。

お母さんズは踊りまくっている。なんでサンバ？

〜〜さんはお茶を啜りながら、温かい目でこちらを見守っている。

「お～～い。そこで何してんの！　早くこっちに来な！」

次期神様候補の～～は、うれしそうに笑っていた。
今日の中で最高に見れて良かつた笑顔かもしれない。
もう訳のわからなくなつたこの会は夜中まで続いた。

H&Rローグ（前書き）

続きがあつますが、まだ執筆しておつません。

それって、続き、ないんでしょとか言わないでください。

一応、構成だけはあるので書かれる時に書きたいですね。

ですが、ここで終わりです。

あのカップルは帰ったが、残りの一人は寝泊まりするところがないらしく、そのまま居候するとか言い出した。

「だって寝床がないと生きていけないんだよ？」

「その通りです。隆明様、お願ひします」

いや、俺に聞かれたって……。

「別にいいわよ～。部屋も余ってるしね～？」

なんの問題もなくすんなり決められる母を尊敬したくない！

妹も了承し、二対一で僕の負けとなつた。

今日は色々あつたから、そのまま寝よつとしたが自分の部屋の前には伊豆那がいた。

「ちょっとといいか？」

「なんかあつたか？」

「話しひきたいことがある……」

「じゃあ、早く入りな……」

なんかあつたか？ 不満そうな顔でもないし、なんだらう

「私は隆明のために来たと言つたけど、実際は現神を長生きさせようとするための副作用でしかないことを言わなくてすみませんでした啊！」

部屋に入つて、椅子が一つしかないからベッドに座つてもらつた。

「別に謝るほどでもないんじゃないか？」

「こいつは助けたいんだろ。今の神を。

「何かしたい時なにかをする。そつやつて私は現神に育てられたの

「父親だとか言つてたよな？」

「本当は違うけどね。人間で言つ父親的存在ではあつたんだよ。そして、私のようにある日、次期神様候補として選ばれた。彼は選ば

れながらにはやりきると言つて、無我夢中に何でもやつてた。元々、頭は良く回るほうで、神の補佐もしていたこともあつたと言つていた。だから慣れていたんだろうけど。しかし今回…予想外のことが起きてしまつて、あとどのくらい持つかわからないけど、なるべく長生きして欲しいんだ…」

「僕たちの…せいなのか？」

「そつは言つてない！ 隆明はなにもしてない！ なにもしてないんだ…」

そんなに自分に言い聞かせているところを見てしまつと、かわいそうになつてしまつ。

僕は実際やつた覚えもない。

運命だつたとしか言えないんぢやないかと思つ。

僕を生んだお母さんに罪があるわけでもない。

それでも

「別に、僕に全部吐いちゃつてもいい…」

「え？」

「お前が僕に可能性があると思ったから、いつちの世界に来たんだろ。

なら全部言つちゃえよ。頼み事でも愚痴でもなんでもいいんだよ。まず否定することはやめよな？」

僕はあることに気付いた。

こいつはさつき何と言つたか？

「なんにもしてないんだよ… まだなんにもしてないんだよ…」

「…どうこうこと？」

「ふう～。今度はこっちの番だ。

「ちゃんとわかるように説明するから聞いてけよ…」

「……うん」

「二人とも僕の人生に干渉した。それは裏からだけだつたよな？」

「まあそうだけど…。気付かないまま不幸児から抜け出して、ちゃんと残りの人生も送れるようにサポートするつもりだつた。だけど、

だけどね…。どんなにやつても隆明は不幸の道を歩いてしまった。
他の不幸児たちは少しでも救いの手を出せば、うまく不幸からの脱出が出来たのに。なんで。なんでなんだ！ なんでかわからないんだ！

僕の能力はホントに、スゴイのかもしれない。

僕に関わった周りの奴らを不幸にさせている。今現在も。完全にグシャグシャの啜り泣き。これを見てしまふと耐えきれない。近くにいる者はたぶん何気なく、僕から離れていったのだろう。僕の内なる物が何なのか知らないけど、本能がそう叫んでいたんだろう。

だからこいつも本当は逃げたいのかもしれない。

次期神様候補だから絶対なにもかもうまくことを運ばなきやいけないと思っていたんだろう。

だが、こんなにも予想外のことばかり起こす僕が怖くなつたんじやないか？

今にでも僕から離れて、また違う神様の能力を吸う人を探していい方向に持つていこうとするんじゃないかな？

だけどな？ 今は泣いていいんだよ。

これからなんだよ！

「否定はするなよ！ 僕にはまだ知らないことが多い。多いんだよ。たぶんお前と僕とでは桁外れだろうな。… でもな？」

なんか言つるのが恥ずかしい。

しかしここは頑張るんだ、僕よ！

「まだ始めたばかりなんだから、もうちょっと頑張ろうぜーー今日の朝から今まで、たつた2人だけで僕の人生を変えるための作戦を練つていたんだろ？ だつたらさあ！ 僕もませて欲しいな！」

「…？」

目は充血して、頬にはまぶたにたまつた涙が出てきている。それを何回も手で拭いてしまつて肌が荒れ始めている。そんな啜り泣きもしないでくれ！

そんな状態だとなんだかな。そのへん心の奥でなにかが暴れている
ような感じになってしまつんだよ！ああもつつ！

「の頭に手をポンッとのせて

「僕も仲間に入れて欲しいの！三人で頑張ろっよって言つてんの
！」

「えつ…グスツ…だ、だつてパートナーだつて

「そつやつて言つたのはお前だが、僕はまだ認めてなかつただろ？」

「…うん」

「そんで僕は、お2人さんのお仲間になりたいわけだよ！わかつ
たか！」

思いつきし頭を撫でまくる。

「な、なななにをするんだ！」

「で、認めてくれんのか？」

「それはそのうーー

「どつちだ！」

「えええええい！黙れ黙れ！認める！認めてあげる…」

なぜ上から田線なんだ？まあいいか。

「じゃあ早く寝ろ！明日から大変になるんだからさー..」

切り替わりはやつ！

「じゃあじやねえ！お前はここで寝るな！僕の聖域から出で
け！」

「イヤだつて言つたらっ？」

「早く出でいけ！」

ドアを開けて、そのまま放りこむ。そしてすぐに閉じる。

『開けろう！あけろ！開けろおおつー』

「うつさい！近所迷惑だ！」

知らん知らん。また明日。このことは明日済ませよう！

とにかく疲れたからもう寝よう。

そして、今に戻る。

現在僕は今、学校に向かっている。

朝から僕は、老けたおばあさんの顔を見るなんて不幸で仕方ない。それに朝食を食わず、弁当を作る時間もなく、そのまま出てきてしまったため昨日と同じで、「コンビニ」によつて買わなくちゃいけない。また、昨日のように事故ることは避けたい。

どうしようか。行く道を変えてみるとか、走つてみるとか、他に何かいい案はないだろうか？

「では、私たちにお任せください」

「なぜ横にいるのHイルさん？ 本当にこの人の気配が感じられなかつた。

「それでなんですか？ 僕は急いでいるんで！」

「そのまま学校に向かつてくださつて結構です。私たちがサポートしますんで」

「えつと、弁当を畳けてくれるところ」とですか？」

「その通りです」

「これは結構ありがたい。じゃあ、ありがたく。

「お願いします！」

「承知しました」

学校の方に向けて歩き出す。結局、遠回りになつてしまつた。

「とてもとても楽しい日々が始まります」

後ろからそんな言葉が聞こえた。楽しい日々つて？

そして僕は昨日に引き続き、今までにない人生を歩んでいくことになつてしまつた。

Hピローグ（後書き）

この話は、一回削除します。

なので、ここまで読んでくれた人に感謝したいですねw

これからも小田浩正をよろしくお願いします。

今は、『電車内は人の中』で頑張ります。

ですが、もう一つ作品を考えています。

載せるかは、まだわからないのですが、知らないうちにふと、載せているかもしません。

なので、よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0305ba/>

神がここにいる

2012年1月5日21時52分発行